

スキマにこき使われ、九尾に教えを乞い、化け猫に笑われながら、
幻想郷を駆け巡る

スミスエアロ.M

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平成11年 ただの会社員はある日不思議な夢を見る。

それを聞いた同期や上司の勧めで、リラックスを兼ねて森林浴に行くことに。

それが彼の運命を大きく動かす出来事になるとは…

目覚めよ新しき自分

エブリスタで書いていた物を改訂し、こちらのサイトに書くことにしました。

シリアスとありますが、基本コメディとほのぼのしています。

設定の改変とかあるけど、笑ってくれ。急にタグが増えたり、タイトルなどが変わったりするぞ。

では本編で会いましょう！チャオ！

近況報告で執筆状況やこぼれ話なんかを書いています。ぜひそちらも読んでね！

2021年5月30日 タグ性転換を追加。

2021年6月7日 独自解釈を追加。

2021年11月6日 タイトル変更 なかったことにして！

2022年2月7日 タイトル変更 旧名「東方魔人録〜人と妖と外来人〜」

あと月の16日に投稿しますので、以下よろしく〜

〈お知らせ〉

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 前書き | 1 |
| プロローグ | 3 |
| 忙しい人向けの現代編（幻想入りの経緯） 1～5話 | 6 |
| 第1章 日常の崩壊と台本なき物語 | |
| 第一話 夢と会社 | 8 |
| 第二話 ご飯に行こう！ | 11 |
| 第三話 守矢神社にお参りしよう！ | 15 |
| 第四話 休暇と殺人事件 | 19 |
| 第五話 森林浴に行こう！ | 23 |
| 第5・5話 変色眼と逸脱者 | 26 |
| 第六話 妖怪という生物 | 28 |
| 第七話 イオという人物 | 32 |
| 第八話 九尾の従者と行き倒れ | 35 |
| 第九話 一睡の幕間と褐色の寝坊助 | 39 |
| 第十話 新しき自分と長き旅路の始まり | 43 |
| 第一章キャラ紹介 | 48 |
| 第一章 幕間 | |
| 幕間 第一話 恐怖！マッスル・パーツ株式会社 | 53 |
| 第二章 万屋、幻想郷、新たな出会い | |
| 第零話 森の取引 | 55 |
| 第0，5話 霊力と魔力と妖力と少年〈前編〉 | 60 |
| 第一話 私は元気です | 64 |
| 第二話 戦いの基本は手札の確認から | 69 |

| | | |
|-----------|----------------|-----|
| 第三話 | 一寸先は闇の中 | 72 |
| 第四話 | 勝利と作戦と： | 75 |
| 第五話 | 帰宅、そして説教 前編 | 78 |
| 第六話 | 帰宅、そして説教 後編 | 81 |
| 第七話 | 可憐なる退治屋、超えるべき壁 | 84 |
| 第八話 | ツケは必ず帰ってくる 前編 | 91 |
| 第九話 | ツケは必ず帰ってくる 中編 | 93 |
| 第十話 | ツケは必ず帰ってくる 後編 | 96 |
| 第十一話 | 茶屋的一幕 | 98 |
| 第十二話 | 本の返却日 | 102 |
| 第十三話 | 氷のアイツ | 105 |
| 第十四話 | 火の粉 | 108 |
| 第十五話 | 別のやり方 6月26日改訂 | 112 |
| 第16話 | 香霖堂 ↑最新投稿デス | 116 |
| 幻想郷特別譚 | | |
| 幻想郷でのお正月① | | |
| 小話集① | | 122 |

前書き

どうも初めまして！

数ある二次創作小説からこの小説を選んでくださりありがとうございます。
ございます。

申し遅れました。私目は作者の代理人兼上司エイジェントの新速にいそくと申します。

さて、この物語は所謂幻想入りですが、何やら原作オリジナルと差異がある様
です。主人公は幻想郷にとつては蚊のような存在ですが、面倒ごとに
巻き込まれてしまう運命からは逃れませんが、彼があそこで何も成し、
どう死ぬのか…お楽しみください。

えっ？こつちじやない!?…申し訳ありませんゲスト読者様、私目カンペを
間違えたようで…

この作品はエブリスタというサイトで執筆していましたが、規約変
更で二次創作が描きづらくなり

「せつかくだから、ハーメルンで書くか」

という経緯がありまして書くことになりました。一からまた書く
のはだる…少々面倒だったのでこれをきっかけに執筆することを決
心したのです。

やばい。1000文字いかないよ。これ所謂あいさつだからそこ
まで計画してないんよ。

あつ、初めまして！作者のE a r o s u m i s u . Mです。以後お
見知り置きを…ちなみに飛ばして本編に行つて良いですよ。ここか
らはあわあわしてるだけなので。

それにしてもどうしよう…1000なんて考えてないよ。前のサ
イトはそんな制限なかなかったし、ハーメルンきついんじや。ああ
嫌われるよ。最初からこんな怪文ぶちまけて初見さんに引かれるよ。
いやだよ。前みたいにpvが61から上がらない状態はきついよ辛
いよ。そうだ！今から「――」↑みたいの間違いを探してもらおう。

別にやらなくても大丈夫！本編に全く関係ないから！ではどうぞ

↓

プロローグ

話をしよう。

これは幻想に起きた少しの歪み。そして運命へと至る物語。

人からも妖からも忌み嫌われ、幻想から否定された少年は過去を知り、目覚めた。その目を赤く輝かせて彼は言う、己の光剣は守護する剣だと。その過去がどんなに残酷でも：

主人を求めた悪魔憑きは願った。どうか主人の手で、己を殺めてほしいと強く願った。自分が自分でなくなる。自殺はできない。私にはソレに抗う力はない：

かつて国を追われた科学者は、はるか遠い宇宙の故郷に帰るために月を奪い返そうと企む。

歯を食いしばり、ゆつくりとその時を待つ。

一人の旅人が幻想に降り立った。我が主神を現界させるため。今は神々によつて封印されてしまった現人神に恩を返す。

彼は再び人から魔法使いになることを決心した。

ふむ：まだ時間はあるな：そうだ！少し神について話そう。

大昔：いや、今現代にある過去を意味する言葉では、表現できないほど昔の時代。

具体的には神の時代、ギルガメシュ叙事詩より前の時代だ。

そうは言っても現代の我々が科学の叡智によつて生活しているのと同じで、その時代の人間は魔法や霊法といった、いわゆる非科学的な力を用いて生活していた。神との繋がりを一番濃い期間でもあったな。

さてここからが本題だ。ある日、一人の人間が悪魔と契約した。実を言うと、あれを悪魔というのはどうかと思うが：便宜上仕方がな

い。

その人間はその力に飲まれ、破壊の限りを尽くした。森を焼いたり、国を滅ぼしたり：ああ、大陸を沈めたりもしていたな。

そんなもんだから、人が大勢死んだ。死にすぎて乾いた笑いが出てくるほど。いやー：あの時は酷かった。閻魔も死神も大忙しき。

それで珍しく、神も対処に困っていた。人と悪魔が結びついたその何かは神に近い存在だったのだ。神は神を殺すことはできない。いっただって神は人を殺し、人に殺されるものなのだ。しかし、あまりにもそれは強すぎた。人間の手に余るのだ。このままではダメだと、ソレを殺す殺せないの前に人が死滅すると、神々が封印を考えた。問題を先送りにするだけなのだ：しかし、それらは杞憂となった。

人の身でありながら、そこらの神を超える力を持つ者たちが現れたのだ。

一人は影を用いて、武器や兵士を創造し、ソレが作った取り巻きを一匹残らず叩き伏せた。

一人は光り輝く白い鎖を生み出し、ソレの左腕をもぎ千切り、顔面に鎖の束を叩きつけた。

一人は炎を用いて、全て焼いた。

正直、炎の彼が一番無茶苦茶やっていた。ソレをまるで子供のようにに相手取り、殴り、蹴り、投げて、炙って、吹っ飛ばして、折って、焼いた。

：うん、まあ二次被害が出たけど、成し遂げた事が事なので、無かったことにされた。

そしてこの3人は我らの世界に呼ばれ、裏表ない感謝をされた。絶対神ゼウスが頭下げたのは見ていて楽しかった。

そして神は言った。

「我らと同じ存在にならないか？」

影の人と炎の人は断った。即答だったな。んで鎖の人は神となった。

これでこの物語は終わりだ。一応その後を言うと影は行方不明、炎

は幸せな家族を作って亡くなり、鎖は最近、無断の異世界転生を違反とする法を作った。

おや…もうこんな時間か。話に付き合ってくれてありがとう。

ここからはその先子孫の物語だ。

忙しい人向けの現代編（幻想入りの経緯） 1～5話

〈主人公〉

主人公の名前は海堂直也。小さい頃に両親を火事で亡くし、ヤのつく職業の親戚に育てられる。

「母さんと父さんは死んでない。連れてかれたんだ」

本人はそう信じ込んでおり、警察にも言ったが気が動転していると判断される。その時からずつと誰にも話さずに両親を探している。現在はマッスル・パーツ株式会社に勤務。同僚としてオカマ気質な鈴木、上司の浅沼がいる。マッスル・パーツ株式会社は幕間からどうぞ。貧乏舌であり、回らない寿司より回転寿司の方が良いと言い放ち、同僚の鈴木をドン引きさせた。ちなみに、味覚音痴とかそういうのではなく、質より量を優先する傾向にあるだけである

虫の知らせとか危機感知能力が備わっている。第二話では落ちてきた植木鉢から鈴木を守っている。精度はあまり良くないし、感知したとてそれを回避できる保証はない。

たまに漢字を間違えることがある。

守谷神社の風祝である東風谷早苗と学生時代に面識を持っており、気軽くからかえるぐらいの仲である。第三話の最後には普通の人間には見ることはできない諏訪子と神奈子を目視できている。二人曰く徳が高い人間だという。

〈幻想入りの経緯〉

会社は完全週休2日制を採用しているので土日が休みになっていた。海堂はテレビで森林浴の特集を見て、特に行くところもなかった。そこで、そこに出向くことになった。

詳しくは第五話を読んでもらえるとわかりやすいが、そこで起きたことがきっかけで彼は意識を失う。そして、目を覚ませば見知らぬ土地に迷い込んでいた…そこから物語は始まります。

現代編の要約はこのくらいですかね。ぶつちやけ一〇五話まで読んでもらいたいのですが、一足早く幻想入りが見たい人向けに作成し

ました。

もちろん、今まで読んでもらっている人もおさらい的な感じで読めるようにしたつもりです。何か不足な点がありましたら感想欄にてお願いします。

最後に補足です。初見さんにはネタバレを食らってしまっているのでぼかしておきます。あまり気にしない方のみどうぞ。まあ、あんまりネタバレじゃないのでテキストにどうぞ。

へ海堂の行動原理は「何者かに連れて行かれた両親の捜索」です。その目的に対しては一途ですが、絶対にやってはいけないことの区別はちゃんとついていきます。ただし、それは第一章だけの話です。第二章からはどんどん幻想郷に馴染んでいく物語なのです。く

第1章 日常の崩壊と台本なき物語

第一話 夢と会社

「はっ!？」

いつもは、ゆっくりと起きるのだが、今日は文字通り飛び起きてしまった。身体が汗でベタベタして気持ちが悪い。

「…変な夢見たなあ」

そんな独り言がでてくるほど珍妙な夢を見た。

どんな内容かというと、目が痛くなるほど赤い一室で、羽の生えたヨ…お嬢さんとバチボコ戦っていたのだ。

「意味わからん」

そう吐き捨て、立ち上がろうと体を動かすと、突如全身に痛みが走る。

「痛てて!?!キンニクツウかあ?！」

先ほどから飛び起きたり、筋肉痛に襲われたりしている海堂直也という男はそこまで大きくない会社で経理関係の仕事に就いている。

外回りとかの体を動かさない仕事だから、筋肉痛とは無縁のはずなのだ。

そこで海堂は、もしやさつき見た夢のせいなのではないかと考える。

「な訳ないよな」

しかし、すぐにその線は切れた。当たり前だ。突然の筋肉痛だ!もしかして夢のせい?とはならんだろう。

海堂は頭が変になったなど考えながら、テレビをつけ会社に行く準備をする。

(近頃、社会人をターゲットとした凄惨な連続殺人が多発。警察も懸命に捜査をしております…)

やれやれ、またこれか

海堂はため息をつき、日本人らしいご機嫌な朝食をとり、皿を洗い、カバンを持ち会社に出社した。

海堂が勤めているマツスル・パーツ株式会社は、家電などの電気製品に使われる部品を主に生産しており、彼はその経理をしている。海堂がいつもどうりタイムカードを押し、自分のデスクに向かうと、同僚である鈴木と会った。鈴木は毎朝笑顔でこう言う。

「ヨー！海堂ちゃん！今日もいい天気だねえ！」

この人はいつもそうだ。晴れならとにかく、曇りでも、雨でも、雷雨でも、この人にとってはいい天気だ。あとちよつとオカマなのだ（本人認定）。海堂はいつものように素っ気なく言葉を返す。

「ハイハイ、イイテンキデスネ。スズキサン」

「全くもー海堂ちゃんはつれないねえ…」

「そりゃあ、毎日天気関係なく同じこと言うから、マンネリなんですよ」

「うーん…レパトリー増やすかあ」

その後も二人は雑談をしていると、突然ぬつと大柄な男が入ってくるなり、二人に声をかけてくる。

「おい！鈴木！海堂！ぺちやくちや話す時間は終わりだ！仕事に取り掛かるぞ！」

「了解しました」

そして二人は決して楽ではない仕事に取り掛かる。これがいつもの日常だ。

「それにしても海堂、お前、体調が悪いのか？」

仕事が一段落し、昼休みに入った時に二人の上司である浅沼が訪ねて来た。頭はハゲ散らかしているが、ガタイはゴツい。

「別に、いつも通りだとおも…」

「嘘よー！さつき書類を持って行こうとしたら歩き方がガタガタだったの見てるからね！」

どこから現れたのか鈴木も横槍を入れてきた。正直話したところで笑われるのがオチなので、海堂は今朝の夢は他人に話したくないと考えている。すると浅沼はため息をつく。

「どうしたんだ？笑わんから正直に話してくれないか？」

この上司が珍しく真剣な眼差しで聞かれたので、海堂は根負けし、大人しく夢について話すことになった。

数分後…

「ウーン…つまり、あれか？夢の中で少女と戦っていて、目が覚めたら全身筋肉痛ということ？」

「はい。えらくハッキリしました」

鈴木が一文でまとめ、海堂が頭を掻きながら補足を入れる。浅沼は筋肉隆々な両腕を組み神妙な顔で唸る。

「なるほど…」

「浅沼さん知っているのですか？」

「ああ、わかったさ。お前がそんなに疲れていたなんて」

「まあ、そんな夢を見るほど疲れていたのね海堂ちゃん…」

こいつらに期待した俺が馬鹿だった。まさか浅沼もボケに走るとは。

「お前、ちゃんと休んでるか？うちは社長がボディビルの大会に出るから土日は休みになるからな。まさかとは思うが、徹夜でゲームとかしてないよな？」

「流石に徹夜でしないですって。高???人もゲームは一日1時間と云っててでしょ」

「えっ？海堂ちゃんはあれ真面目に守ってるの？」

「え？」

その後、その日の仕事は七転八倒ありつつも、なんとかこなせたのであった。

第二話 ご飯に行こう！

「海堂ちゃん！飯食いに行こうよ！」

仕事が終わリタイムカードを押して定時に帰宅しようとする、鈴木が飯に誘つてきた。海堂はそんな気分では無いので断ろうとする。

「悪い。早く帰りたいんだ……」

「奢るわよ？」

「行きます！」

奢りという素晴らしいワードを聞き、先ほどまでのゲンナリはどこに行つた海堂。鈴木もこれには苦笑いだ。

「あんた……その貧乏性はどうかならないの？」

「いやー、何食おうかな♪」

「聞いてないし……まっいつか！」

ということ、海堂は鈴木と飯に行くことになった。そしてその道中で海堂は今日のことをもう一度聞いた。

「そーいやさ鈴木。今日の俺そんなにガタガタだったのか？」

「当たり前ヨ！私は元々医者を目指していたから、人の健康なんて一目で分かるのヨ」

「へー。このスペックなら医者になれるだろ……」

「ああ？」

海堂がボソツとそう言つたら、鈴木が見たことない顔で睨んできたので適当に誤魔化した。どうやらこの話は鈴木にとって禁句らしい。海堂はそつとして置くことにした。海堂は話を切り替えるため、どこに食べに行くか聞くことにした。

「鈴木。そーいやどこに食べに行くんだ？」

「牛丼屋だよ？」

「やったー！」

「あれ？思つてた反応と違うわね……」

鈴木は海堂が牛丼屋と聞いてなんか愚痴るかと思つていたが、普通に喜んでいてびっくりした。正直張り合いがない。しかしソレでも海堂はグツとガツツポーズをしているので良しにすることにした。

「いやー喜んでくれて何よりよー！さ、早く行きましょう！」
「あつ待てよ鈴木！」

Side change 海堂直也

鈴木が俺を牛井屋に連れてつてくれると聞いて、俺が喜んだのがそんなに嬉しかったのかさっきの機嫌が良くなり、浮き足立っている。一人暮しを始めてから外食なんて全く行ってなかったし、食事は全部自炊かコンビニ弁当で済ませていたので、この機会に店の牛丼を楽しもうと思う。

「あつたわよ。ほらあそこ。あのオレンジの看板の所」

鈴木は指をさしてそう言う。確かあそこはこの地域でも有名な牛井チエーン店だ。アーケードで良く割引券を配っている所を見たことがある。

「じゃあ、行きましょう♪席が空いてなかったらやだからね」

そう言つて鈴木は少し駆け足で店に向かおうとした。その時だった。

ビキッ

自分の頭の中で何かが弾ける。方向は上？そう思い上を見ると、三つほど植木鉢が落ちていることがわかる。すぐに鈴木の前ガツと掴んで、引き止める。

「ちよ、何すんのよ!？」

鈴木がそう言つと、ガシャンという音を鳴らし、鈴木が進もうとした方向に植木鉢が落ちてきた。

「え……」

「さ、行きましょう。席がなくなりますよ」

口を開けて啞然としている鈴木に声をかけてやると、鈴木は掠れた声で返事をして改めて牛井屋に行くことになった。

Side Reset

「いやー食った食った♪」

「……」

海堂は久しぶりの外食に満足し、鈴木はさっきのことを引き摺ってさっきから、黙っている。しばらく歩いていると、鈴木が言葉を紡ぎ始める。

「さっきの何？」

「あれか？俺でもよくわかってないけど、多分虫の知らせというやつだと思う。まあ、昔からそうだったし」

「昔からっていつから？」

鈴木が次々と質問を投げかけてくる。海堂は面倒だと感じながら答えていく。

「うーん。小学生から自覚したけど、赤子の時からソレっぽいのはあつたな」

「そう…不謹慎だけど聞いていい？」

「どうぞ」

「あなたの家が火事になって、両親が死んだ時も感じたの？」

鈴木がそう言うと、突然海堂は足を止め、頭を掻きむしり始める。

「鈴木イ。母さんと父さんは行方不明ですよオ。遺体も燃えカスもなかったですよオ。死んでるなんてあり得ないですよオ」

「か、海堂？」

「オレエ、ずっと探してんす。見たんすよオ、両親連れて行った奴もオ」

頭を掻きむしる速度が速くなっていき、その目からは光がなくなっていた。鈴木は困惑していた。まるで人格が変わったかのように様子がおかしくなったのだ。鈴木は必死に話を変えようと考えた。

「そうね！あなたの両親はきつと生きてるわよ！」

「そうだよオ。そうですよね。うん…」

「そうだ！両親が見つかることを祈ってお参りしましょう！この近くに神社があるのよー！」

そして再び海堂は足を動かした。鈴木はこの海堂の豹変から、何かに取り憑かれているのではないかと推測したのだ。他に理由はあり

そうだが、今の鈴木にはそれしか考えられなかったのだ。何より…鈴木は恐れたのである。あの底が見えない眼球を…

第三話 守矢神社にお参りしよう!

海堂の豹変を見て、鈴木は近くにある守矢神社に海堂を連れていくことになった。心なしか鈴木は歩く速度が速い。

「おいおい、歩くの早くない? まだ18時だぞ?」

「それでも今冬だから、日が落ちる前に行かないと。」

「はあ…」

あの時から、海堂は生気が薄れたようなペライ返事しかしない。土地勘に詳しい鈴木は迷いなく目的地に進む。海堂の身に何が起きているのかわからないのだ。無理はない。海堂はあくびをして話す。

「フア〜。お参りなら明日でもいいでしょ」

「何か憑いてたらこわいでしょ? お参りついでに払ってもらいましうよ! お金は払つとくから!」

「いいけど…帰りてえな…」

海堂はボソツとそう呟く。猫背になって両手をポケットに突っ込んで不良みたいに歩いている。心なしかドヨドヨとしたオーラも感じ取れそうだ。

「ここか? えらく立派だなあ」

「私何回もここにきてるからね。というか会社の近くにあるのに知らなかったの?」

「神社は正月にしか行かないからな」

二人は守矢神社の立派な鳥居の前についた。その壮大な神社は鈴木が何回もくるのも納得がいくものだった。海堂も曲がっていた背をまっすぐにする。

「じゃあ入るわよ。鳥居の前で一礼を忘れずにね」

「流石に知ってるって。ガキじゃあるまいし」

鈴木は今の海堂に違和感を感じている。この男はいつもこんなに口調が荒くないのだ。二人は鳥居で一礼をし境内に入る。二人の目の前に大きな社が見える。

その後も神社の作法を鈴木とともに学んで行っていく。

鈴木がお祓いの手続きをしてくるから待ってなさいと言われたが：暇だ。まさか年始でもないのに神社に行くとは鈴木のをやつに毒されたか。いやはやあの言いくるめには参ったもんだ。日は：まだ落ちてはないが、じきに落ちるな。さっさと帰りたいなあ。

「あの一」

「ん？誰だ？」

すると、誰かがぼーっとしていた俺に声をかけて来た。声がした方に振り返るとそこには、緑髪のロングヘアーに、深緑な瞳、そして白地に青の縁取りがされている巫女服に身を包んだ少女がそこにいた。んでなんの因果か、俺はその少女を知っている。うーん、名前なんだっけ？また、彼女も自分の顔を見て、何か思い出したかのような顔をする。

「あれ？あなた…海堂さん？」

「おつと？なんで俺の名前を…あー」

思い出した!!たしか…

「君の名前は東風谷早苗とうふうこくさなえだっけ？」

「東風谷早苗こちやです！わざと間違ってますんか!？」

東風谷さんにふざけていると言われ怒られてしまった。真剣マジで間違ったことは言わないでおこう。無駄にバカが露呈してしまう。

「ジョークだ。ジョーク：てか良くわかつたなあ。ゆうて部活で1年と半年だったろ。そういや、あの頃君は中1のセイラアガルだったな」

「変な言い方やめてください。通報しますよ」

「やめて」

流石に未成年とはいえ、警察のお世話になるのは嫌だ。なぜかあの会社は首にはならんが、プロテインを飲まされてしまう。それは嫌だ。

「どんな会社に勤めてるんですか…」

「そんなことより、東風谷さんは巫女の一家だったんだな。初めて知った」

「正確には風祝かぜはふりですけどね。八坂神奈子の巫女でもあります」
「はえー、と気の抜いた返事を返し、境内を見渡す。」

ホワーン

社殿の方に目を向けるとしめ縄の輪を背にした女と被っている帽子に眼が付いている女の二人が喋っていた。なんだか頭がぼわーとしてくる。

「…口をポカンと開けてますけど、聞いてるんですか？」

「すまん。あそこにいる二人の女性がな…」

「へえ、海堂さん。女の人が好きなんだ」

「いや、でも流石にしめ縄はちよつとな」

「…え？」

あれ？俺変なこと言った？東風谷さんが驚いた顔をしている。まるで自身が聞いたものが信じられないみたいな顔だ。

「どうかしたか？」

「…ああ、いやなんでもないです」

「海堂直也さんですね。お祓いの準備ができましたので、案内します」

「んじゃ。またな」

お祓いの準備ができたらしく、社殿に案内される。さつきと祓われ帰ろう。東風谷さんのあの顔が少し気がかりだがな。

Side Reset

海堂のお祓いが終わり、二人が帰った後…

「神奈子様、諏訪子様今いいですか？」

「ん？どうしたんだい早苗？好きな男の子でもできたかい？」

「んああ。じゃあ、さつき話してたの彼氏かな？」

山の神である洩矢諏訪子とさつきから酒を嗜んでいる八坂神奈子が早苗をからかう。早苗はため息をつく。

「違いますよ…なんか彼にはお二人の姿が見えていたようで」

「え？」

神の姿は人間には見えない。だからこそあの時海堂が言ったことは早苗を困惑させるには十分だったのだ。

「ありや。こんな世の中でも徳の高い人間はいるんだねえ」

「最近信仰が少ないからね：鈴木という人間ぐらいだよ。うちに来てくれるのは」

「諏訪子様と神奈子様。あまり下向かないでくださいよ」

神奈子はかんらんかんらんと笑い、日本酒をあおる。

「私たちが見える人間かあ。早苗のお婿にしちやいなよ」

「な、なー!?そういうわけじゃ…」

「声が震えているじゃないの。やっぱり気があるんじゃないの?」

早苗がムムムと口をとじ、それを見た二人に神が笑う。どうやら早苗は今後も振り回されそうだ。

第四話 休暇と殺人事件

お祓いやらなんやらがあったが、海堂の身に何か起きたことはなかった。鈴木もホツとしていたが、本人は何の事かさっぱりであった。

そして仕事に日々を費やしていき、ついに社員全員が待ち望んでいた土日休みがやってきた。

「海堂ちゃんはこの土日どこか行くの？」

「んー…決まってるないな」

そして今週最後の仕事を終え、休暇をどう過ごすか話し合っている。ちなみに鈴木は島根の神社に行くようだ。そして、海堂はそれにちよつと引いていた。

「なんか趣味とかないの？筋トレとか」

「それ浅沼と社長の趣味だろ。言つとくが、俺は筋肉バカにはならんからな」

「そんなこと言ったらまたコツテリ搾られるわよ」

このように海堂はたまに余計なことを言う癖がある。前も似たようなことを言い、^{筋トレ}教育を受けたことは記憶に新しい。海堂は背筋がゾツとなる感覚に襲われ、先程の言葉を取り消した。

「家で休んでるわ。どうせどこ行っても人混みでいっぱいだよ」

「えー？折角の土日よ？確かに混んでるかもしれないけど、それも楽しんじゃないの♪」

鈴木はどうやらアウトドアなタイプのようにうだ。人混みを楽しめるのは強いだろう。そして話し合った後、定時が来たので社員はそれぞれの自宅に向けて帰っていく。ある人は家族サービスをするため、ある人は家に籠って自分の趣味に明け暮れる。そんな素晴らしき土日休みが始まった。

翌日

午前9時、海堂は起床した。あの日から毎日変な夢を見ているが、

すぐに忘れるようになった。海堂は欠伸をしながらもテレビをつけて、朝食の準備をする。白米に味噌汁、焼き鮭にキャベツの千切りのパックをボウルに盛りつけたサラダ。そして焼き海苔とふりかけを机に並べる。実に日本人らしいご機嫌な朝食だ。

「いただきます」

家には海堂一人しかいないが、子供から習慣でつい言ってしまふ。彼はそこまで料理が得意ではないが、炊いた米は丁度良い硬さだし、味噌汁も熱すぎて、火傷をすることを除けばとても良いものに仕上がっている。しかしやはりというか焼き鮭は少し焦げていた。練習が必要だと海堂は考えた。そうして朝食を楽しんでいると、テレビから気になるニュースが流れてくる。

（昨晚、???の男子トイレで男性が殺害されるといふ事件が起きました。遺体は身元が判明不可能なほど損壊しており、警察は快樂目的の殺人犯として調査を進めている様子です）

「うわ。またかよ」

海堂はこの前も同じような事件が起きていたことを思い出す。思い出したところで何もできないが。そしてニュースは切り替わり、森林浴の特集が流れた。

「はえー森林浴かあ……ここから近いな」

ニュースでやっていた場所がここからそう遠くないので行くことにした。どうせ家にいても寝ているだけだし、引きこもるよりはマシだと考えていたんだらう。そうと決まれば善は急げというように、海堂はリュックサックを引っ張り出し、その中に色々詰めていく。

財布、タオル、スポーツドリンク、警棒（?）、懐中電灯（?）、ケータイ、あとその他諸々の物。この男は探検にでもいく気なのか?準備が終わると、長年愛用している自転車に跨り、森林浴をしに出かけた。

Side Change 刑事

駅のトイレに鑑識やら入って行っている中、新米警察官はホトケの写真を見て吐いていた。

「おいおいしつかりせいや。これじゃこの先きついでえ」

ワシがソイツに向かつて言うが、いまだに吐き続けている。まあ、無理もないか。

連続猟奇殺人事件。それが今世間を騒がしめる事件や。今と違ってもかれこれ1年前ぐらいからおんなじ事件があつたけどな。

「すいません。先輩…」

「じゃあない。切り替えていけ」

後輩が吐き終えて、ようやくと現場を見ることが出来る。遺体は回収されたが、白いテープでそこに遺体があつたことを証明しておく。すると後輩が口を開いた。

「凶器は見つかってないんですよ」

「ああ。ゆうてもあの損壊具合だと、ナイフとかナタとかの刃物は有り得なさそうやな」

遺体の損壊は酷く、手足が分断され腹部から内臓が飛び出し踏みつけられた跡があつた。警察という仕事に就いて、慣れるもんじやないけど、死体に慣れとるワシでもこの一件は異常やと感じるものや。

「にしてもケツタくそ悪いのお。人のやることやないで…」

「…これ本当に人間がやったのでしょうか？」

「お？後輩が変なこと言い出しよつた。どうゆうことやろ。」

「凶器は不明。損壊が酷い遺体。気がならないのですが、もう一度あの写真を見たら、切られたというよりも引きちぎられたという方が納得がいくんですよ。」

「んー？つまり、バケモンがやったちゆうことか？んなアホな…」

「オエー」

後輩がまた顔色を悪くして吐き出す。お家芸になってきたなあ。確かにバケモンがやったかもしれないが、証拠がないしな。そう思い、ワシは遺体があつた血塗れの所を見る。

「おあ？」

「どうしたのですか先輩？」

「いや、ここになんか書いてある…アクマ踏み潰してにじませとるな。ホシは見られた不味いことでも書いてたんかなあ」

「そりやダイングメッセージに気づいたら、誰でも消そうとしますよ」
「そりやそうか」

そうしてワシと後輩は現場から離れる。あの滲んどった血文字：ワシにはアクマという文字が書かれてるような気がした。本当にホシはバケモンなのか？もし仮にそうやったら：警察の手に負えんということになる。

第五話 森林浴に行こう！

自転車でいくこと30分。外は冬特有の肌寒さはあるが、海堂にとっては涼しい気温である。自転車を駐輪場に停めて少し歩くとテレビの森林浴場が見えてくる。

「森というか、樹海じゃないか？」

冬なのに木には葉が生い茂っており、目隠ししてここに連れてこられたら確実に迷うほど、木々が密着している。まあ、せつかく来たので海堂は森林浴「冬は森林浴できないでしょ」というツツコミはやめてね♪を楽しむことにした。森林の空気はいつもの混み込みとした町と違って空気が澄んでおり、とても体に優しい空気が彼の身体に入ってくる。

樹木の香りが、たまに来る社長のフットキャンプ研修期間で荒んだ心を癒し、枝木のざわめきで気持ちが安らいでいく。ここで初めて海堂は森林浴に来て良かったと心から思った。目で楽しみ、耳でも楽しめる。どうせならインスタントカメラでも持ってくれば良かったと少し悔いる。ところが、海堂が落ちた葉をサクサクと踏みつけながら歩いていると、彼の目の前に縄を持ち思い詰めた様子でズンズンと男が歩いている。海堂は訝しんで声をかける。

「おい、そのアンタ。縄持って何しにいくんだ？」

「…ツ…関係ないだろ！」

「どうした？大声出して？」

男が海堂に振り向く。その目が血走っており、髭もボーボー。顔には自分でつけたような引つ掻き傷も付いている。おおよそ仕事か何かでやらかし、思い詰めてしまったか、自殺願望疾病や人間関係など解決し難い問題から逃れるために死を選択しようとする状態。海堂はこれを鈴木から聞いたことがあるため知っている。を患ってしまったと海堂は考える。

「まあ、落ち着いて。酒なら奢るから」

「だめだ。僕は死ぬんだ。家族と友人が死んだ。ニュースみたいなバラバラ殺人事件みたい！」

「どうしました?」

男が叫んでいると、少し年の行った巡回員のおっちゃん came。海堂は男について話すとおっちゃんは宥めるように男に話しかける。

「まあ、お茶を出しますので、私に話してみてくださいよ」

「ああ!来た!僕を殺しに追いかけてきた!嫌だあああああああ
あ」

男は叫び、森の奥へと走り出す。二人は一瞬呆気に取られるが、直ぐに追いかけることができた。

「くそ!あいつ自殺する気だ!てかおっちゃん早くない!?!」

「舐めるな!元陸上のインターハイ優勝だ!」

海堂は木々を不器用に避ける一方で、おっちゃんはアスリートのようにスイスイと追いかける。

「このままだと罫があかない。私が先回りするから兄ちゃんはそのまま追いかけていってくれ!」

「わかった!」

そう言っておっちゃんは道を逸れていく。海堂は一人で男を追いかけることになった。

数分後:

「ドラシヤアアイ!!」

海堂がなんとか追いかけていくと、突如横からおっちゃんが男にタックルを喰らわせて取り押さえた。スト2の本田を連想させる飛び込みだったと海堂は思った。おっちゃんは男を立ち上げらせる。

「ふん!ここで自殺しようなど100年甘い!」

「あああああ!来た!来た!来た!来た!」

「全く:何がき」

ズシヤ ボトリ

何が起きたのかわからなかった。頭が追いつかなかったのだ。突

然、おっちゃんの頭が吹き飛んだ。吹き飛んだ頭は海堂の足元に転がる。そして海堂の理解が追いつかぬまま、今度は男の体が縦半分に裂けた。海堂はあまりの出来事に息をすることすら忘れ、頭が真っ白になる。そして後ろから声が聞こえてきた。

「ようやく見つけたぞ。海堂直也」

東方魔人録　く人と妖と外来人く

第5. 5話 変色眼と逸脱者

やあ、五話ぶりだね。私が誰だって？プロローグのお兄さんさ。さて、海棠君の意識が飛んで一区切りついたから少しこの世界のことについて語ろう。

人でも妖でもない存在『変色眼』と『逸脱者』についての話だ。ここでは総じて超人と呼ぶ。

あと、この話は飛ばしても構わない。要するにすごい人が今後出てくるという解釈で構わない。

彼らは見た目は人間そのものだ。というか元々が人間なのだから当たり前だな。彼らの特徴はなんと言ってもその身体能力だ。計算上では人間の2倍ぐらい：ちなみに、この数値は最低位瞳の色が変化するだけの変色眼。それでも人を超越した身体能力を持つ。の変色眼であり、生まれつきや神に与えられた場合はもつと高い。なお変色眼の由来は瞳の形、色が変化することから名付けられた。

そして、一部の超人はそれぞれ固有の能力を持ち合わせる。

ん？東方にも能力を使えるって？ああ、忘れていた：奴らは自己世界という結界を最初から持っている。これがある限り、強力な精神攻撃を遮ることができる。また、そいつが神ならば信仰が全くなくても幻想の存在にはならず、存在し続けることができる。なお、自己世界はやり方さえ分かるなら習得可能だ。しかし、その方法は私が知っている人物であの方しかいない。あの幻想郷の賢者でもこのことを知らないだろう。逸脱者は変色眼以外の能力者を指す。

どうも、作者です。あと300文字を埋めるためにここに来ました。裏話的な何かです。この作品は改訂してと書いています。どの辺が改訂してるかというところ、海棠の豹変シーンと東風谷早苗との面識や鈴木神社巡り、海棠の勤めている会社の描写ですかね。海棠のキャラも変えました。鈴木は常識人な感じで、早苗は基本は常識人にして、神奈子と諏訪子は神様らしく、早苗をからかっても信仰を集め

ようとしている感じにしました。ちなみにこの作品のヒロインはまだ決まってません。私が恋愛を知らないので、描きにくいのですがラブレターって入りますかね？

ハーメルンでの執筆も慣れました。太文字とか拡大とか縮小とか、使いやすいです。

最初からこつちにすればよかったな…おっと、愚痴になりました。これからもよろしく願います。

第六話 妖怪という生物

「…ん」

あれからどれ程の時間が経ったのだろうか。海堂は幹の太い木に背を預けていた。その体にはツルも巻き付いている。

「…！ カツ、ハッ！」

海堂は声を出そうとするが、喉が枯れているからかまともに声が出せなくなっていた。それでも海堂は懸命に声を出そうと唾を乾いた喉に送り込んで、声を出そうとする。

「…あ、あー…：よし」

まだ掠れてはいるものなんとか声を取り戻した。次に海堂は木にもたれている身体を起こそうとする。手に力が入らなかった気がしたが、すぐに動くようになり、ツタを千切って身体を起こす。海堂はようやく地に足をつけられた。

「さて、とりあえず帰るか」

どれくらい寝ていたのかはわからないが、とりあえず家に戻ることにした。立ち上がったせいなのか頭痛がするが、気にする程ではないだろう。

森を歩くこと数十分。海堂はいい加減認めることにした。ここはさつきいた場所ではない。そして自分は今迷子であることもだ。

「なんでこうなるのかなー！」

海堂は吠えるがどう考えても自業自得である本当にありがとうございしました。

「…なんか遠くでバカにされてる気がする。にしてもどうするかな」

頭を搔きながら考えてみることにする。もちろん歩きながらだ。現在の整理すると、海堂は気がつく木にもたれていて、声が出せなくなっていた。自宅に帰ることにしたが、ここはさつきいた森ではない。そしてそのことに気がつかないで今絶賛迷子ということである。「…仕方ないよね。同じ光景ばかりなのに、さつきと違うとか気づく

訳ないじゃん。つまりは俺はバカではない。QED証明完了」

とんでもないはやめちや理論くりだした。確かにそうかもしれないが、ちよつとは危機感を持ってほしい。

その後も独り言を言いながら歩き続ける。外からみたらやばい奴だ。しかし、こうでもしないと彼は歩いてられないのだ。皆さんは月明かりしかない夜の森を一人で歩けるだろうか？正直歩きたくはないだろう。海堂もそのうちの一人だったということである。

――――
そんなこんなで、歩き続けること数分後：

海堂は一人黙って歩いている。独り言のネタがなくなったのだ。だが、目が夜に慣れてきたので恐怖感は薄れていた。だが、歩いていて傷づいたこともある。全身が動かしにくいのだ。足や手を動かさうとすると、ほんの少し遅れて動かせるようになる。つまり初動が遅くなっていたのだ。海堂は自分の欠点に気がつく。

サクサクさくサク

自分の足音以外の音が聞こえる。そう、さつきから誰かにつけられているのだ。誰かはわからない。後ろにいるのだが海堂は振り向く勇氣がない。振り向いたら死んでしまうかのような：そんな感覚に襲われるのだ。しかし、このままでは埒があかないだろう。海堂は勇氣を振り絞り後ろに振り向き：

「誰だ！」

「わっ!？」

そこにいたのは小さい女の子だった。黄色の髪、白と黒の洋服とロングスカート、これだけ見ればいたって普通の少女だろう。その瞳が血に濡れたような赤でなければ。この少女が海堂をつけていたと海堂は推測する。理由はわからないが警戒しておくに越したことはないだろう。すると、少女の方から口を開く。

「あなた、こんな所で何しているの？」

「あつ、えつと…散歩？」

「こんな所を？」

「こんな子供に迷子になったなんて言い出せない。流石に恥ずかしいのだ。それを聞いて少女も首を横に捻っている。」

「あなた外来人よね。ここだと見慣れない服装してるし」

「多分そうなのかな。てか俺が外来人だどうなるんだ？」

「うん。私が外来人に向かってこう言うの」

そう言うと、少女はフワツと一息で海堂に近づき、海堂と顔を合わせる。そう、少女は浮いているのだ。口元をニイッとさせ鋭い犬歯を海堂に見せつけこう言った。

「貴方は食べていい人類？つてね」

その質問に海堂は恐怖を感じた。そこしれない恐怖を。だが恐れたら死ぬ。海堂は引き攣らせながらも、言葉を返す。

「それはすごいな。そうだな…君は何者だい？」

「あら、察しが悪いね？私は妖怪として名前はルーミア、あなたの名前は？」

「妖怪か、初めて会ったよ。つと名乗られたのなら名乗り返すのが礼儀だろう。俺の名前は海堂直也。海堂とでも」

ルーミアは赤い瞳をゆらゆらと照らしながら、舌なめずりをする。

ルーミアはニヤニヤしており、その表情はまるで獲物を見つけた肉食獣が如く。海堂はいつ殺されるかと冷や汗をかいている。

「フフっ、そんな顔しないで…別に今すぐ何かしようというつもりはないのよ？」

「そうか？俺は外来人で君は妖怪だ。この後の結果はCMを待たなくても分かると思うなあ」

「フーン、意外と理解がいいね。まあ、その答えは私がさつき人を食べていなかったら正解だったよ」

ルーミアは口を拭う仕草をする。どうやらルーミアは海堂に会う前に食事をしていたみたいだ。海堂はその人間に感謝しつつ話の続きをする。

「じゃあ、お腹いっぱいってこと？」

「いや？満腹でも保存食の確保はするよ？」

「あつ…そうか」

海堂は察した。恐らくここでルーミアに殺される。そして彼女の住処に干し肉のように保存されてしまうと。しかし海堂は逃げない。ここで取り乱して一目散に逃げた所で、捕まって殺されるのが目に見えるのである。相手はこんな暗闇でも狂いなく後を追いかけることができる人物…いや、妖怪だ。逃走は不可能だろう。それならば、少しでも会話を続けることに意識を集中した。

「なら俺は死んじやう感じ？」

「そうなのだー」

有無を言わさないルーミアの無邪気な死刑宣告に海堂の顔から希望が消えた。そして湧いて出てきた感情は絶望の2文字だった。

第七話 イオという人物

「おいーそこで何をしている!」

二人が睨めっこしている時にその声が聞こえてきた。ルーミアは思わず海堂と距離をとった。心なしか彼女の顔が青ざめていくように見える。

「あちやーここアイツのナワバリかー」

「あの…縄張りって?」

「会えばわかるよ…」

ルーミアがうんざりして海堂の質問に答えるとドン!という着地音が聞こえてくる。海堂は音のした方向に目を向けると、そこにはルーミアより少し高い子供がスーパードロウ着地をしていた。子供が顔をあげ、ゆっくりと立ち上がる。ツギハギの和服、病気のような白い肌、男か女かわからない中性的な顔立ち、そして何より印象深い赤く光る右目。その瞳は海堂に恐怖を与えるが、思わず美しいと思ってしまうほどの輝きを脳に焼きつけた。子供は指を2回ほど鳴らす。

「ルーミアと…人間…だが、見ない顔だな?」

「アハハ。さつき捕まえた私の獲物だよ♪…はあ」

さつきまで無垢な態度で海堂を殺そうとしていたルーミアは諦めの表情を浮かべる。どうやらこの男が縄張りの主だろう。

「チツ…人里の連中ならバラバラにしてやろうと思ったが、外来人に罪はない。てか俺の目の黒いうちは手を出させないからな!」

「ブーブー、せっかく見つけたのよ!」

「お前今週二人やったでしょ!もう食ったの!?!」

ルーミアと子供がそうして口喧嘩を始めた。海堂はその会話内容にSAN値をゴリゴリ削られてしまうが、ついていけないので、黙って聞いていることにした。というか目が赤いのに目が黒いうちはなんて突っ込んで欲しいのか?

「わかった…ちやうど俺を殺しにきた退治屋二人をそつちに渡す」

「…それでいいのだー」

どうやら話し合いがまとまったようだ。人の命がめちやくちや軽い気がするが、海堂は考えないことにした。すると子供は海堂に声をかける。

「悪いいな。待たせちゃまった。ルーミアに神社まで連れてかせるから」

「えっ…大丈夫？それ？」

「安心しろ。途中までついてやる」

「わはー信頼ゼロなのかー」

「当たり前だ！」

「保存食にしようとしたじゃないですか！」

海堂、ルーミア、子供の3人が神社と言っていた場所に歩いて向かってる。道中で犬なんかムカデなんかの妖怪が出てきたが、ルーミアは欠伸をして、子供が白く光るラ〇トセーバーのようなもの懐から取り出し、一瞬のうちにバラバラにした。ちなみに子供の名前は教えしてくれなかったが、イオと呼んでほしいと言われた。性別は今男らしい。海堂はその光景を見て口を開く。

「すいません。君はジエ〇イなの？」

「あー確かそういう映画あったね。結論言うと違うぞ。これは光剣こうけんつて言ってるな…」

イオによる光剣の解説があったが、要するに魔力なり妖力なり生命力なりをエネルギーにして刃を形成する剣である。利点は軽くて持ち運びが楽で何よりサビない折れない。ただ結構疲れるらしい。

その後、イオが偵察のため少し前が出る。その時に海堂はルーミアに彼のことを聞いてみることにした。

「あいつ何者なの？縄張りとか言ってたけど？」

「んーわかんない。ナワバリは彼が人間に言った一方的な挑発ね」

「どう言うことだ？」

「あーそれはねえ…」

ルーミアが答えを出す前にイオが二人の前に現れた。イオいわく

ここから先は自分とルーミアは行けないと言う。海堂はこの先どうするのかと聞くと、イオはまたしても懐から何かを取り出す。それは一丁の銃と弾丸だった。そして海堂はその銃に見覚えがあった。

「…これ、レイジングブル?」

「なんでアンタ知ってんだよ!?!」

海堂を引き取った親戚がヤのつく職業だったのと、その銃が若の愛銃だったので、誕生日プレゼントで同じものをもらいそうになった経緯があるのだ。撃ったこともある。(もちろん私有地で)

「これ、河童のこの?」

「うん、作ってもらったの。でも合わなくてな…」

イオとルーミアがこそこそ何か話しているが、海堂は目の前のリボルバーに釘付けで、聞いていなかった。

海堂はそれを右手に持ち二人に送られる形で、再び森を歩く。その銃が意外と重いのは内緒である。

その後、一人になった海堂は少なかったが襲ってくる妖怪を撃ちながら歩いていく。結局イオが何者だったのか、ここはどこなのか聞きそびれたが、どうせすぐ帰るのだから気にはしていない。

しばらく歩くとうっそうとした森を抜け、ついに道に出ることができた。海堂は口笛を吹き、道なりに進んでいくと鳥居が見えてきた。だが海堂に待ち受けていたのは数百段に及ぶ石階段だった。海堂は思わずこう呟いた。

「…まじっ?」

第八話 九尾の従者と行き倒れ

海堂は石階段を一段づつ進んでいく。コツコツと踏みつけながら歩いているとそれは起きた。いや、起こっていた。段々と意識は朦朧となり、全身に張り裂けるような激痛が走る。それでも足は止めず歩き続ける。ここで倒れたら恐らくもう起き上がれないであろう。

「はあ…はあ…カハッ…!?!」

息を切らしながら口を手で押さえながら咳き込み、その手のひらにはべっとり血がついていた。普通なら驚くか狼狽えるかの二つだが、今の彼にその様な思考が回るほど意識がはつきりとはしていないのだ。それでも取り憑かれたかのように登り続けついに彼らが言っていた神社にたどり着いた。そこには箒で落ち葉を集めている紅白の和服を着た少女がいた。少女は海堂の存在に気づき彼に声をかける。

「あなた、誰？」

「ああ、俺…は…ゴツホゴホ！ゴホ…カハッ！カハッ！」

「え?!」

海堂は名前を名乗ろうとするが、咳き込み、そして口から血を吐く。しかも一回ではなく何回も何回も血を吐き続けた。少女も驚き彼に近づく。

「だ、大丈夫…」

すると海堂は血を吐くのが止まった。しかし今度は膝から崩れ落ちるように倒れた。少女は察した。このままではこの人は死んでしまふと、だがあいにく自分はそれを対処するすべは持ち合わせていない。少女は無力感で涙をこぼしそうになる。

「霊夢!? そいつは!?!」

だが運命は二人を見放さなかったようだ。金髪のショートボブに金色の瞳、頭には二つの耳、漢服に法衣を被せた服装、そして腰からは扇状に伸びる九つの尾。今期の博麗の巫女の教育係八雲藍その人である。少女は泣きながら彼のことを伝える。藍は買い出しに使っていた籠から写真を取り出し、海堂の顔と見比べる。そして確認が済

んだのか彼の額に札を貼り付ける。

「まさか、こいつが…」

「大丈夫なの?…」

「あっ、ああ…あとは私がやっておく。霊夢はいつもの修練をしておいてくれ直ぐに戻る」

少女を宥めて藍は海堂を抱えて空を飛ぶ。行き先は自分の主人の元である。

side change 海堂直也

あれからどれほどの時間が経過しただろうか。海堂は目隠しをされ、布団に寝かされていた。

「…ん?」

目が覚めたので体を起こす。さっきまで血反吐を吐いていたのになんで生きているのか?てかなんで目隠しされてるの?煩わしいので取ろうとする。

「待て。それはまだ取ってはならん」

「…なんで?…え?」

俺の声が高い。アニメでしか聞いたことないぞこんな声!

「お前の体に異変が起きている。主人の前で取り乱されては困るから目隠しをさせてもらった」

なるほど。異変が起きているのは初耳なのだが、今はとやかく言っている場合ではない。言い忘れていたことを言わなければ。

「助けてくれてありがとうございます」

「ふん…主人の命でなければお前のような他所者を助けるわけがない」

「あら?本当は少し嬉しいくせに」

まった。一人増えたな。恐らくそいつの主人なのか?後で色々聞いてみるか。

「さて、海堂直也さんであっているかしら?」

嘘だろ!?なんで名前を…

「なんで自分の名前を？」

「色々調べたのよ。名前、住所、電話番号、親戚の犯罪行為、勤めてい
る会社、そしてあなたの両親のこともね」

side reset

紫が海堂の両親のこと言った瞬間彼は声を鋭くさせて言う。

「おい！あれを知っているのか！？言え！直ぐに言え！」

「貴様！無礼だぞ！」

「まあ、待つて藍。今のは私が悪いから」

藍が海堂を咎めるが紫はそれを宥めて続きを言う。

「海堂さん。確かにあなたの事は知っています。だけどあの事につい
ては知らないのです」

「〜ッ！…すみません…」

「まったく、紫様に感謝するのだな」

紫がパチンと手を叩いて話を戻す。

「さて、海堂さん。あなたの置かれている状況を説明させてもらおうわ
そこから紫の話が始まった。現在海堂は体は死んでいるが生きて
いるという状況になっている。理由はこちらでもわからないそうだ。
海堂の元の体は崩壊しかけており、あのままだとそのまま死んでし
まっていたという。そして海堂はあることが頭に浮かぶ。

「じゃあ…今の俺は誰なの？」

「安心して。そんな哲学的な問題でもないわよ。生物としての根幹は
魂にあって、肉体は器なのだから」

「お前でわかりやすく言うなら、魂が運転手で体が乗り物だ」

海堂は納得する。さて、少し補足すると記憶は普通は脳に遺伝する
が、適切な手段と条件が揃えばそのまま記憶が持つていけるのであ
る。

「あなたは死者でも生者でもなくて存在があやふやだったから、違う
身体に移し替えることができたのよ」

「なるほど。というかもう目隠しとっていいですかね？」

「まだ説明が終わってないだろう！少しは待て」

「いいわよ。意外と肝が据わっているし」

紫はそう言うのと海堂は目隠しを外す。ここまで惨殺死体やら妖怪やら命が軽い会話を経験してきた海堂は大抵の事には驚きはしない。

最初に目に写ったのは褐色の細い腕とフニフニした手だった。

「ほら、鏡よ」

紫が海堂に手鏡を渡してくれたので、それで自分の顔を見る。小麦色の肌とたれ目にソフトモヒカンな自分の顔がその鏡にはなく。写っていたのは褐色の肌、つり目、少しギザ歯、薄い灰髪へのミロングだった。完全に女顔になった海堂はもしやと思い自分の股に手をあてがう。

そして気づく。いや、気づいてしまった。自分の大切なモノがなくなってしまうことに。

第九話 一睡の幕間と褐色の寝坊助

「ふう、やっと落ち着いたわね」

「…」

海堂がめちやくちや取り乱し、それを二人はどうか落ち着かせて隣の部屋に寝かした。海堂はうなされていようだ。紫は一息ついているが、彼女の式神である藍はジト目で紫のこゝろを見つめる。もちろん紫はその視線に気づいた。

「藍？どうかしたの？」

「…あれをどうするつもりですか？」

間が空いて、藍は主人の考えを問うた。彼女の目には諦めと呆れ、この式神は紫のこれからが手にとるようにならわっている。

「うーん…とりあえず彼と話さなければならぬわね。考えはあるけど、まずはそこからよ」

「何が目的ですか？またやる気ですか？」

「…勘違いしては困るけど、別に彼を追い詰めようとか考えてないわよ？」

紫は感じ取っていた。最近藍が自分に対して冷たいのだ。無論、藍の忠誠は高い。しかし、主人に対して懐疑的になっているのだ。紫は誤解を解くために一つ話をすることにした。

「幻想郷のバランスが傾いてきているのは知っているわね？」

「妖怪の活性化や人間の弱体化ですよ。買い出しの時に里に向かいますが、あまり良い雰囲気ではありませんでした」

「それもあるけど、それだけではバランスはあまり崩れないわよ。問題は流れ者よ」

それを聞いて、藍は耳をピクリと動かす。紫は気にせず話を続ける。

「奴らはいつ、どこで、どうやって現れたか、それはわからない。一つだけ言えるのは奴は全員人間に対する良心を持ち合わせていないということ。エサとでも思っているのでしょう」

紫は息を吐き出すように言う。本来は外から来た人間を外来人と

呼ぶが、ただの人間に混じってとんでもないのが来ているため、流れ者と名をつけて区別した。そして彼らが紫の悩みの種であり、幻想郷という存在を揺るがしかねない存在なのだ。その後も愚痴を言うように話を続ける。

「歴代の博麗の巫女も彼らを退治をしようと奮闘したけど、全然ダメ。相手にもならない。あいつら、妖怪とはトントンなのに人間が相手だと強くなるのはなんでかしら？」

「…フツ」

藍は驚いている。自分の主人は幻想郷を守るためなら本当になんだったとする。ある時は幻想郷を破壊しようとした妖怪を一人の子供を囮にし、その子供ごと殺した。ある時は、巫女が不在の時に里で祀られていた少年を巫女に仕立て上げ、負の感情で悪霊を集めるため、彼を肉体的にも精神的にも追い詰めた。はつきり言つて異常だ。そして、当時は何も感じていなかった自分が怖い。それでもなお自分は紫の式神であり続ける。自分の主人は悪役を引き受けたがるから。

そんな冷徹な紫は今では机に突っ伏して、愚痴を言っているのだから思わず笑ってしまう。

「何がおかしいのかしら？」

「いえ、なんでもありません。それで結局どうするのですか？ 黒幕は懲り懲りですよ？」

紫は腕を組み、目を閉じる。そして少し考えたのち目を開ける。

「…決めた。ここは無闇に策略は練らない。彼を従者にするわ」

「思い切りましたね。あまり良い策とは思えませんわ…」

藍は心配そうに言う。だが紫は海堂について確信していることがあった。

「大丈夫よ。彼はまだ力はないけど、今まで来た流れ者に比べてまともで、純粹で、素質もある」

『目には目を歯には歯を』という言葉があるように、海堂には彼らに対抗する力を持っている。紫はそれに気づき、藍に写真を渡して、いざとなった時にここに運んで貰えるよう命を出したのだ。

「そうですか…？ そうですね、あの体は何処から持ってきたのですか？」

無縁塚ですか？」

「あれは贈り物よ。差出人不明でぽつと玄関に置かれてたけど、私でもあれ程精巧な肉体は作れないわよ。だから信用した」

紫は扇子で口を隠して微笑む。やっぱりちよつと抜けてる。藍は自分の主人に対してそう考えてしまった。

「それに貴方が大切にしている化け猫の橙ちえんに後輩ができるじゃないの」

「ああ…確かにあの子の成長に繋がる…」

そして、ここでも八雲藍という妖怪は親バカなのだった。

「…んなあ」

「起きたか」

1時間後、海堂は起き上がった。頭がガンガンと響き、あまり記憶が纏っていない。そして自分の細い褐色の腕を見て、全てを思い出して、泣き始めた。

「ど、どうした？何故泣く!?それほどもとの体が恋しいのか」

「だって!だって!まだ異性と付き合ったこともないし、フーズクとかいうやつにもいったことないんだよ!なのに!」

「つまり、童貞ということか?別に気にしなくても良いだろう」

海堂はまだ穢れを知らなかった。藍は気にしなくても良いと言われて少し落ち着いた。

「気持ち分かる。性別が変わったのだから動揺するのも仕方ない。だが、そうしなければお前は死んでいたのだ。方法はクセが強いがそれでも紫様はお前を助けたのだ」

「それは…嬉しいけど。なんで?」

海堂にとっては当然の疑問だろう。自分は何か特別というわけではない。恩を売ったつもりもない。なので、さっきまで顔も見たことない人に助けられる義理はないのだ。藍は神妙な顔でその問いに答える。

「そこは紫様に話してもらおうが、君が今の幻想郷に必要な存在ということとは言っておこう」

「俺が必要な？…分からんな」

「まあ、おいおい説明するとして、いつまでお前は自分の胸を触っているのだ。まな板が如し胸のくせに」

藍は海堂に対して毒を吐く。彼女にも思うところはあるのだろう。海堂は顔を少しムツとさせる。

「…仕方ないじゃん！鍛えていた筋肉がどっか行って、なんかムムニした物になってんだもん！というか、最後は別に気にしてないからな、俺はこんなんでも一応男だからな…男だからな！」

「知っている。何も2回も言わんでいいだろう」

海堂はジト目で藍を見つめる。藍は海堂に対して純粹で扱いにくいという感想を得た。確かに今までの奴らに比べると数百倍までもだが、こいつもこいつで厄介なのである。話が通じるならまだマシだ。

「…どうせ、男勝りの女性として見られるから別に良いか。さあ、紫様の元に戻るぞ」

「はーい…変な感じだなあ」

海堂は全体的に緩くなっていることに違和感を感じたがあまり気にしないことにした。

第十話 新しき自分と長き旅路の始まり

海堂と藍は襖を開けて居間に入る。そこには座布団を敷いて茶を飲んでいる紫の姿があった。紫は海堂に気づいて、飲んでいたお茶を置いて彼に話しかける。

「起きたようね。待っていたわよ」

「すみません…取り乱してしまって」

「構わないわ。藍、彼にお茶を」

「分かりました」

藍は部屋から出る。海堂は敷かれた座布団に座り、机越しに紫と対面する。

「では、改めて自己紹介しましょう。私の名前は八雲紫。この幻想郷を作り、管理している賢者の一人です。妖怪でもあるけどね」

「じゃあ…海堂です。海堂直也。人間…です」

シン…とした静かな状況に海堂は重圧感を感じる。紫は気にせず話を続ける。

「さて、私から話すことは二つ。一つ目は今の貴方について、二つ目は貴方の両親について話すわ」

「ツ…はい」

海堂はふと湧き出た衝動を何とか封じ込める。今ここで問いただしても意味がないと考え、話を聞くことにする。

「まず、貴方の体についてだけど、貴方がここに運ばれたときすでに肉体は死んでいた」

「でも、入れ替えたから自分は生きています。そうですよね」

藍は神妙な顔で海堂と向き合い話す。

「そうよ。貴方は生きています。人造人間の体でね」

ホムンクルス。それは魔術の叡智の結晶とも言える技術の一つである。難しいことは省くが、確実に言える事はそれは限りなく人間に近い人形であるということだ。もちろん海堂はその単語で紫のことかわかる。

「俺は人間じゃないということですか」

紫は顔に一切の変化を見せない。しかしその顔には同情、憐れみという感情が浮かんでくる。短い時間が過ぎ去り、紫が口を開く。

「…そうよ。でも重要なのはここからのなの」

「長く生きられないんですか?」

「それに関しては心配はいらないわ。むしろ人間より長く生きられるし、身体能力にも影響はないわ」

「え?じゃあ…あ」

海堂は思い出した。幻想郷に来る前に誰かに何かされた。その誰かは自分を殺そうとしていたのではないかという仮説が思い浮かんだ。そして、海堂がそれに気づくのを確認すると、紫は口を開き話を続ける。

「気づいたみたいね。貴方は何者に命を狙われている。そいつが貴方が生きていると知れば、外に出ても、ここにおいても遅かれ早かれ貴方は殺されてしまう」

「つまり、いずれ殺されるということだ。ほらお茶だ」

藍がお茶汲みから戻ってきて海堂の前に湯呑みを置く。湯呑みからは温かな湯気がのぼっている。

「あ、ありがとうございます」

「礼なら紫様に言っておくといひ」

そう言つて藍は紫の隣に座る。式神の彼女は優しいんだか、厳しいんだか、分からない。

「他にもあるけど、とりあえずこの辺ね。何か聞きたいことはあるかしら?」

「どうすれば殺されなくて済むのですか?」

「まあ、落ち着け。そこは後で言う。他はあるか?」

「特には」

海堂は聞きたいこともなかったもので、さっさと次の話をしてもらうことにした。

「では、二つ目の両親についてなのだけど…」

紫曰くまだ、確定ではなく、考察の域を出ていないということらしい。海堂は別に構わないからさっさと言ってくれと、何か棘のある言

い方で紫を急かした。

「貴方のことを調べた時にあることがわかったのよ」

「あることとは？」

「貴方の家系はどうやら昔から代々伝わっている魔法使いの家系であることがわかった」

海堂は驚いた。自分が魔法使いの一族？まるでフィクションのよ
うな真実が明らかになって海堂は動揺もした。

「しかもタダの魔法使いの一族ではない。お前の先祖はかつて悪魔を
討ち滅ぼした魔法使いだったのだ」

「え？…それとこれと何が関係している？」

「つまり、貴方の両親を攫った犯人は貴方を殺した奴と同一人物の可
能性がある。家族全員に干渉するほどの動機がそいつにはあるはず
なのよ」

さて、今までの話をまとめるとこうなる。

海堂の体はホムンクルスということ

このままではいずれ殺されるということ

海堂の家系は先祖代々伝わる魔法使いの一族ということ

海堂の両親を攫った人物は海堂を殺そうとした人物と同一の可能
性があるということ

この4つだろう。海堂は湧き出る何かを押さえつつ質問をする。

「ソイツは今どこにいるノオ？」

「分からない。わかってても今の貴方では同じてつを踏むことになる
わ」

「見過ごせっていうんですか!!」

海堂は机を叩き叫ぶ。藍は海堂の異変に気づく。さつきから海堂
は両親の話になると、感情が昂る傾向がある。海堂の火を消すために
藍は言い宥める。

「待て、そうは言っていないだろう。考えてみる。なぜお前の家を火事
にして両親を攫ったのか」

「俺を狙った理由？…俺が邪魔だったから？」

「そうよ。だけど、奴の情報は少ない。そして幻想郷が抱えている問

題も多い。だから…よければ私の従者にならない?」

「…え?」

突然の提案に海堂は困惑する。しかし自分の状況を知っているのはここにいる紫と藍だけだ。この提案を断ってもいいみたいだが、海堂にとつてこの提案は今の所最善とも言えなくもない。また、提案を断つても生きることができるとはできるが、その場合いずれ殺しに来る存在から身を守れなくなる。そもそも自分の両親を攫った犯人から逃げるということを海堂が考えとは思えない。つまり、このことから海堂の次の返事は容易に予想できる。

「いいんですか? いや、俺は別に構いませんが、体は変わっても一応人間ですよ。役に立てるかどうか」

「そこは大丈夫だ。むしろ素質はあるから、安心して紫様の役には立てる」

「じゃあ提案を受けるといふことね?」

不自然なほど話が早い。海堂は思わず異議を唱える。

「待つて、待つて、本当にいいの? 価値観は変えられないから、人は殺せないよ?」

「そんな甘ったれた考えで、お前の両親の仇は打ちたくないか?」

「そ、それは…だが、そのために不必要な命を奪う必要はない。アイツさえ殺せばいいから」

「む…だがな」

「話し合いはいいけど、それは後でも良いわ」

海堂と藍の話し合いが熱を帯びてきたところだが、紫がストップをかけて話を戻す。藍は少し不服そうだが、海堂はホツとしている。

「では、改めて聞きます。海堂直也、私の従者になりませんか?」

「はい。喜んで」

返事は即答だった。もはや、海堂に迷いはない。

「分かりました。貴方を私の従者として幻想郷に受け入れることを許可します。では最後にこちらを」

「あ、はい」

海堂の前にペンと一枚の契約書が差し出される。ここまで来てハ

められることはないと思うが、一応全て目を通すことにする。
契約書

①この契約によって結ばれた主従関係は主人と従者の同意のみ取り消せる

②従者は主人に忠誠を尽くす。また主人は従者を思いやること

③従者は主人の命に原則従うこと

④この契約書は両者の総意で書き換えることができる。

八雲紫

④が少し気になるが、とりあえず大丈夫みたいだろう。契約書を入念に読んでいる海堂の姿を見て、紫は自分が胡散臭いということ改めて認識した。海堂は契約書に署名して紫に渡す。

「これで私たちと貴方は縁が結ばれました。頼りにさせてもらおうわよ。海堂」

「精一杯やらせてもらいます」

「紫様の期待に応えられるように頑張ってもらいたい」

今日この日、ここに主従が結ばれた。

八雲紫は幻想郷を守るために

海堂直也は両親の仇を打つために

スキマ妖怪 八雲紫と海堂直也ホームケルスの縁が結ばれた。

「それでは、私は巫女の元に戻ります。海堂、これから頼むぞ」

「さて、とりあえず雑務を任せるわね♪修練はそれからよ」

「あ、はい……」

さて、物語は一旦区切りがつく。だけど、海堂の旅路はまだ始まったばかり、しかし運命の歯車は回り出している。先は長くなりそうだ。まあ、どうせならゆっくりと行こう。物語は逃げやしないのだから。

第一章 崩壊する日常と台本なき物語 終幕 To Be Continued ……

第一章キャラ紹介

〈能力の強さ〉

この作品では『〳〵程度の能力』のメインの能力として扱う。それ以外の能力 or 魔法といった技術はサブとしてA, B, C, D, Eと区切られる。

大体の目安はジョジョと一緒に緒だが、詳しく表記すると

A: それで一生飯を食える、超スゴイ、努力だけではたどり着けない領域、達人

B: 熟練された達人、スゴイ、人間が努力でたどり着ける領域、玄人

C: 一人前、フツウ、凡人がたどり着ける領域、

D: 痒いところに手が届くレベル、イマイチ、ハンチク

E: あるだけマシなレベル、サイテイゲン、トーションロー

ちなみにEXや他の表記で表されている時もある。

〈メインキャラ〉

名前 「海堂直也」

年齢 「19歳」

性別 「男性」

二つ名 「現在不明」

能力 「不明」

〈概要〉

我らが主人公こと海堂直也。幼い頃に両親と離れ、ヤーさんの親戚に引き取られた。ちなみに虐待とかはないので、なぜあんなにとち狂うのかは現在は謎である。社会人になった現在は高卒でマッスル・パーツ株式会社に勤務している。ちなみに経理である。

〈性格〉

よくも悪くも普通である。両親の話が絡むと性格がおかしくなるため誰も触れようとしない。嫌味やいじめをしてくる奴にはもれなくグーパン（男女平等パンチ）が飛んで来る。貧乏性であり、高い物

は口に合わない。

〈能力〉

『危機察知 D』

本人曰く虫の知らせ。自身もしくはその周囲の人間の危機を察知する能力。必ず発動するとは限らない。なお、未来視ではないので、危険が来ることはわかってても何が来るのかはわからない。なおこのような察知系の能力は慣れが重要視されるため、近いうちに評価が変化する可能性がある。

〈特技と特徴〉

若頭から教わった銃撃。会社勤めで暗算と書類仕事が得意になった。学生時代はヤーさんのところでお手伝いをしていたため（犯罪行為はしてない）いかがわしい事に詳しい。

〈容姿〉

平均より良い顔立ちに会社による筋トレで得た引き締まった体を手に入れている。髪色は黒でソフトモヒカンである。瞳の色も黒である。普段着はTシャツにデニムのズボンを着て、その上からジャケットを着ている。鈴木曰く

「あいつ、夏で冬でもあの姿なのよ」

…寒がりなのだろうか？よく綾野剛に似ていると言われているらしい。

〈海堂直也 女の子の時の姿〉

身長は152cmで体重は不明である。肌が褐色で髪色は薄い灰色になっている。瞳の色は青色である。ちなみに服装は本編では描写していなかったが、目隠しされていた時は着ておらず、のちの話し合いでは一応毛布を羽織っていた。のちに着ていた服を着る事になる。

名前 「鈴木琢磨」

年齢 「秘密」

身長と体重 「ああ？」

〈概要〉

海堂の同僚である。趣味は神社巡りであり、休日はもっぱら神社に行っているらしい。今こそ会社員だが、昔はバーテンダーだったとか学生時代は番長だったとか逸話がある。しかし本人が酔って言っていた話なので信憑性はゼロ。医大生だったらしいが訪ねようとする
と舌打ちされるため触れられていない。接待が上手い。

〈性格〉

おおらかで明るい。切れると怖いと噂されているが、そんなことはない。むしろ優しいまである。オカマなので口調が女々しい。

名前 「八雲紫」

年齢 「不明」

二つ名 「幻想の境界」

性別 「女性」

能力 「境界を操る程度の能力」

危険度 「不明」

友好度 「不明」

〈概要〉

皆さんお馴染みの黒幕。やることなすこと胡散臭くなる妖怪代表の一人である。姿を見せることがないので、周囲に避けられがちである。色んなところにコネや友人を持っているが、信用はされているが、信頼はされていない。実はかなりの話したが屋であるが、真偽が危ういため信頼し難い。従者には嘘はつく事はないらしい。計画ど通りに物を進めるが肝心なところでポカをやらかすためポンコツとも呼ばれる。

〈性格〉

いつも遠くを見定めているため、概要にあるがかなり胡散臭い。妖怪らしく興味の無い事には関心を持たない。自身が作り出した幻想郷を誰よりも愛しており、幻想郷を守るためならどんな手段だってとる。従者や式神には仕事を投げがちだが、それは彼らを信用しての行動であるらしい。割といい加減である。

「嘘だ。紫様はただ面倒なだけなのだ」

そう言った藍は一週間の間、橙に会うことができなくなったという。

〈能力〉

『境界を操る程度の能力』

毎度お馴染みの能力である。これは全ての事象を根底から覆す能力であり、紫のような少し変わった妖怪や力の重圧に耐えられる者でないといと使いこなせない。

かなり汎用性が高く、結界はもちろんのこと、生物の感覚や記憶まで操ることができる。都合が悪かったことを無かったことにできる。スキマを展開してあらゆる場所にワープが可能である。精神攻撃は即死級の強さを誇るが、物理的な戦いは他の妖怪より劣る。せいぜいスキマから列車やら道路表記を発射する質量のゴリ押しができる。その分式神の藍に任せている。

〈演算能力A〉

超人的頭脳をもち、特に数字に強くフェルマーの最終定理も秒で解ける。その計算能力を活かして強大な式を憑けることができる。

海「俺要らなくね？」

藍「経理仕事は面倒くさくなってこっちに投げるから気にしなくていい」

〈八雲藍〉

(概要)

八雲紫の忠実な式神である。厳密には九尾の妖怪に『藍』という式神を憑けている者。ちなみに好きな物は油揚げである。性格は紫とは打って変わって真面目で礼儀正しく妖怪としては温厚な部類に入る。

(能力)

『式神を使う程度の能力』

式神の身でありながら式神を行使できる能力であり、対象者は橙だ。いわゆる中間管理職のような物であるが、紫より精度が低く、式神にしている橙は完全に言う事に従っていない。

『妖術・陰陽術A』

博麗の巫女の教育係として陰陽術を極めており、人間と比べても練度も精度も高い。もとが九尾なので妖力も高くそれを利用した妖術は敵を圧倒する。紫と比べると直接戦闘能力（正面突破）が高い。

『剣術? Just Saw (見ただけ)』

何者かと戦ったときに見て覚えた技術。?とついているのは現存する武術、剣術に当てはまらないため。適応する得物がないため使用することができない。

名前 「イオ」

二つ名 「赤目、血眼」

性別 「男性」

能力 「不明」

危険度 「高」

友好度 「低」

〈概要〉

魔法の森の奥地に居を構えている謎の人物。右目が赤く輝いており、ナワバリを重要視している。人間か妖怪なのかはわからない。どちららでもないのが正しいか。銃のことを知っていたり、映画を知っているため外来人の可能性もある。

〈能力〉

『剣術? EX』

光剣を用いて使われる剣術。道中の妖怪を一瞬でバラバラにできるほどに熟練されている。EXなのは評価規格外のため。

ルーミアも大人しく退いたり、人間の中でも実戦経験のある退治屋をバカ扱いしていることから強者の印象を受ける。

第一章 幕間

幕間 第一話 恐怖！マッスル・パーツ株式会社

マッスル・パーツ株式会社。通称『マッスル』はち切れる筋肉安心と信頼の工業部
品が売りの生産系工場である。

会社の実績は数々のお大手企業から太鼓判を受けており、ここを現
代の日本いや、世界の企業からも

「マッスルほど信頼できる企業はない」

と言わせるほどの大企業である。

マッスル・パーツはなぜここまで大きいのか？それには三つの特徴
がある。

①未経験、中卒でも即採用。その後の充実な職業訓練の後、資格を
とって正社員になる

②完全週休二日制。有給休暇もしっかり完備。

③毎朝の筋トレ、週一の健康診断で社員の健康をサポート

③が気になるが、ここまでならマッスル・パーツは完全無欠のホワ
イト企業だろう。

しかし、この会社には最大の欠点があった。それは…

「鈴木く出世したい」

「あつそ。じゃあ鍛えたら？」

「…うえ」

そう、この会社：筋肉が正義なのだ。

出世には会社の貢献も加味されるが、何より筋肉が命。正社員でも
普通のサラリーマンより体がゴツイのにこれが主任、係長、課長、次
長、部長の順にどんどんと筋肉が多くなっていく。

取締役クラスになっていくとキン肉マンを超え、ボディビルダーと
しても食っていけるぐらいにはなる。

ちなみに社長はボディビルの世界チャンプらしい。

なぜこの会社はこんなことになったのか？それにはある理由が存

在する。

元々この会社の名前は高木製作所という地味な町工場一つだった。しかし、ある日過労で工場にいるほとんどの社員がダウンした。このままでは生産ラインは動かないので納期に間に合わず、取引先に見放される。

しかし、そんな状況で助っ人で突如現れた筋肉マツチヨ隣町のアメフト部により工場は無事納期を

納めることができたのだ。この事からマッスル・パーツの創始者は「筋肉は全てを解決する」

と考え、今では会社全体の社訓となっている。

2021年7月8日

はい、どうも作者です。残り200文字を埋め参りました。どうですかね？こういう幕間はいわばネタ回として頭空っぽにして書いているのですが、意外と難しい物ですね。

あつ、そうだ（唐突）最低月一のペースで活動報告を書いているので、定期的に覗いてみてね。ソシヤゲとか執筆状況とか近況状況を書いているので

「こいつ何やってんだろ？」

と感じ取ったらぜひ読んでいただきたい。あとついでにコメントもよろしく。反応って意外と気になるもんやねえ。では次の話で会いましょう。ほんじやまたな！

第二章 万屋、幻想郷、新たな出会い 第零話 森の取引

これは海堂が幻想郷に来る少し前のお話。

空が闇に包まれ、雨がザーという音を立てながら幻想郷を濡らす。さて、魔法の森という場所が幻想郷にはある。木々がうつそうとしており、人間に害のある胞子が蔓延している地だ。

そんな森で紫の式神である藍が何かを監視していた。彼女の視線を追うとそこにはボロボロの家があり、人が住むには風通しが良すぎる小屋がある。

普通ならこんなところに住んでいる者はいない。しかし、実際にはいるのだ。

しばらくすると、竹の傘で雨を凌ぎながら家に帰ってくる者が現れた。背丈は低く髪色は白い。その人物は少年であった。

いたいけな子供がなぜこのような場所にいるのかというと、その少年はかつて博麗の巫女がいなかった時期に、勝手に人里の住民がただ強いからという理由で巫女に祭り上げられたからだ。それだけならまだしも少年は目立ちすぎてしまった。

当時、幻想郷を蝕んでいた悪霊がおり、それは散り散りとなって分散し、なおかつ取り憑かれると、どんな生物でも凶暴化して人を襲う化け物になる。だが、少年はソレに取り憑かれても特に影響はなかった。その結果を聞いた主人はその少年を依代にして、少年ごと悪霊を祓うという計画を立てた。

それからというもの、計画は滞りなく進んだ。その少年を臨時の博麗の巫女として働かせ、次の巫女に交代できる頃に、紫はバレないように、人里を妖怪に襲わせ甚大な被害を出し、その責任を少年に擦りつけるように行動をして、里の民に憎悪の対象として見なされるようにした。そして、臨時とはいえ仮にも博麗の巫女だったので、妖怪にも恨みを持つ者を多かった。そして極め付けは生き残った少年の家族に、その少年が自分たちの家族だったという記憶を忘れさせ、退治

屋だった少年の妹からは復讐の対象として剣を向けられた。彼に居場所はなくその頃から目に光は消えてなくなった。

そんな経歴のある少年だが、近頃は様子がおかしくなった。

いや、様子だけではない。行動も戦い方も変わった。

最初に気づいたのは二週間前の出来事、徒党を組んで少年を襲ってきた妖怪を相手に汗一つかかず、一息に瞬殺してみせたのだ。

その際、少年の右目は赤く輝き、獲物を槍ではなく、白い光の刃が印象的な剣を使っていた。

藍は少年に博麗としての技術と教授したが、あのような剣術は教えていない。しかし、その腕は並大抵のものではなく、いわゆる極限の領域までに熟練されていた。

それからというもの、少年は独り言が多くなった。最初は精神的な症状だと考えていたが、赤い眼、謎の剣術、独り言といった要素が絡まり、少年に別の何かを取り憑いているという仮説が生まれた。もしくはは二重人格かのどちらかだと。

そして現在に至る。藍は主人からの命に従い、定期的に彼を監視する事になった。今日も手帳に日誌を書いていく。雑草を当然のように食べ、殺しにきた人間をぶちのめした。そのままほっといて倒した人間が妖怪に食われるというパターンが生まれている。いつものように書き終えた藍はさっさと帰ろうと手帳を懐にしまう。

その瞬間強烈な殺気が藍を襲った

「な!?!」

殺気を感じ取った藍はすぐさま木の上から降りて地面に着地する。それと同時に元いた場所に剣が飛んできて通過して行った。そして、ブーメランの要領でこちらに戻ってくる剣を藍は最低限の動きでひらりと避ける。剣は家の方へ飛んでいき、少年の手元に収まった。

「オレを殺しにきたわけじゃあなさそうが…何しにきた?」

「答えるつもりはない」

「なるほど。じゃ、直接聞かせてもらおうか」

少年は剣を左手に移したと思えば、右手に真っ赤ナイフを握りしめ

ていた。そのナイフを自身の眼に近づけていき…
「切眼^{セツガン}」

少年は右目を切りつけた。藍はその行動に身構える。少年の眼はハイライトがない黒い眼であったと記憶していた。切り裂かれた眼は失明しておらず、藍は監視を始めてから何度も見てきた目の色に変わった。それと同時に雰囲気も変わり、本当にあの少年なのか疑うほど変貌していた。ただ、瞳の色が赤くなっただけなのに。

「さ、どうする。やるか？」

「…戦う気はない。少しお前に聞きたいことがあるだけだ」

「ええ…先に言えよ…」

少年は呆れたように剣を消す。藍はここで戦うことはできたが、メリットがなさすぎると判断した。少年は傘を拾い、雨雲を見て言う。

「こんな天気だ。オレの家で聞いてやる」

そうして藍は少年のナニカに家に招待された。

「これは…」

「どうだ。結構すごね？」

廃墟同然の家の中は外見と大きく異なり、西洋のゆとりのある空間が広がっていた。

「生前、ロンドンに住んできた頃を思い出して作ったんだ。いやー空間拡張とか物質生成とか上手くいくもんだな。魔術嫌いだけどよ」

「そうか…ん？生前ということはお前は…」

「幽霊とかじゃないぜ？もつと別の存在だが、今は関係ない…だろ？」

この数行の会話で分かったことは二つ。一つはコレはこの少年に取り憑いているということ。二つめは魔術などの神秘に熟知しているということだ。そもそも空間拡張とかは結界関連の力だ。もちろん藍にもできるが、外見は変わってしまうだろう。少年はソファに座り、タバコに火をつける。

「んで。聞きたいことって？なんでもは無理だが、大抵のことは話させ」

「そうか、ありがたい…では、お前は何者だ？」

「何者？んー…地上に遊びにきた観光客？」

「とぼけるな！お前は高橋優希ではない。お前のことを聞いているのだ！」

「んな怒んなって。でも実際そんな感じだ。18ぐらいの人体使って人間として日本のノガミあたりをうろろしようとしたら、バグって魂だけの状態でここに来ちゃったの。それでコイツの体に居候してゐるわけ！これでいいか？」

少し叱責したらかなりの情報が手には入ってしまった。やはりコイツ只者ではない。こんな時主人がいればと藍は唇を噛む。

「そうだ。コイツの体にとんでもないモノ憑いてるけど何？」

取り憑いているからかやはり、悪霊の存在にも気づいているようだ。隠しても仕方ないと思わずに少しだけ説明した。一部嘘を混ぜたが趣旨は伝わったようだ。

「なるほど。ソレを祓うためにユウキごとまとめてか…」

「他に方法はない。一つずつ潰す労力も無いからな」

ソイツはうーんとうめき、少し間があいて口を開く。

「普通の霊ならいいが、コレ相手にそれは悪手だな」

「どういうことだ！」

「まった。喉渴いたからお茶持ってくる。紅茶でいい？」

「ムツ…緑茶は？」

「ある。待っとけ」

そういつて強引に話を打ち切り、キッチンに向かった。なぜアイツは今の方法を悪手と言ったのか？他に方法があるとでもいうのか。しばらくすると湯呑みとティーカップを持って帰ってきた。

「さて、話の続きだがちよつと取引をしたい」

「断る」

「事務的すぎる!!あんたらがユウキを殺しにくるのはやめてほしいだけだ」

「ユウキ」と祓う計画なのだ。どのみち飲めん」

ソイツはため息を吐き紅茶を口に含む。

「それは悪手だったの！」

「なぜ？感情論は聞かんぞ」

すっかり日が上り、目にはクマができた。藍は自身の主人である紫に今日の事を報告した。少年に取り憑いたアイツを除いて。自分はどうすればわからない。もしかすると、これは我々が想定している規模よりはるかに大きいのでは無いのかと考えてしまう。しかし、式神としてクヨクヨはしてられない。だが、珍しく藍に睡魔が襲ってきた。とりあえず、少し寝よう。今日ばかりは許されるはずだ。

「あれは悪霊なんかじゃ無い。あれが全て集まれば幻想郷は終わる」

第0、5話 霊力と魔力と妖力と少年〈前編〉

陰陽道とは退ける技術。魔法とは万能にいたる探究。妖怪とは人間が抱いた恐れ。この3つは似ているようで、似ていない。

「わかったか海堂?」

「…zzzz」

藍は机に突っ伏して寝ている海堂を見てため息を吐く。藍がスつと立ち上がり、箆笥の引き出しからあるものを取り出した。それは扇から親骨を外した…つまり、ハリセンである。

「寝るな!!」

パーン!!!というハリセンで海堂の頭をシバくいい音が鳴る。これが漫才なら観客席は大爆笑がおきていたが、折檻なのでそんな声は起きなかった。

「ん!?…んあ…」

海堂は引つ叩かれた頭を抑えながら欠伸をする。その開いた口には八重歯がギリリと光っていた。

「これで何回目だ?海堂?」

「…んん」

「3回目だ。仏の顔も3度までだろう。遠慮なくしばいてやろう」

「!!…はい」

海堂は俯きながら返事をする。教え方が悪かったのだろうか、そう藍は考える。

「海堂、魔法はどうだ?」

「全然わからん。公式とか法則とか…独特なんだよ」

「…しかたない。とりあえず、勉強は切り上げよう」

海堂は目を見開き、藍を見つめる。海堂は慣れない学問を前に疲弊していたのだ。

「…マジ?」

「本来なら少し後に話すべきなのだが…このままではやる気が続かないだろう?」

「心が折れそう」

疲弊し、FXで金を溶かしてそんな顔をする海堂を見て、藍はニヤリと笑う。

「それなら、他の力の話をしよう…そんな嫌そうな顔をするな。キミのような女性「俺は男だ!」、者でも楽しんで聞けるだろうから」

side change 八雲藍

さて、この幻想郷には大きく3つの力が存在する。霊力、魔力、妖力。他にもあるが今回はこれだけに焦点を当てる。

「うーん。違いはあるのか?同じく魔法を起こす源みなもとでしょ」

「うむ、要するに根本は一緒だが派生が違う」

霊力なら霊法、魔力なら魔法、妖力なら妖術。体に蓄える源によって使える技術が違う。なお、幻想郷の多くの人間は霊力をもっている。

「えーと、俺は…魔力だっけ?」

「お前の場合は特殊だが、魔力で合っている。人造人間ホムンクルスといえば、魔法だからな」

しかし、海堂の体はホムンクルスにしては余りにも高性能だ。霊力と妖力関連の技術の方が理解が深い。しかし、それでも人間の能力の限界を超越し、妖怪と殴り合えるその身体は私が用いる魔法の知識では到底不可能であると断言できる。

「なるほど、さつき人造人間ホムンクルスといえれば魔法って言ったけど、魔法と霊法で違いはある?」

「ある。かいつまんで教えると、霊法は邪悪な物を退けるのに焦点を当て、魔法は万能に焦点を当てる技術だ」

「はえー…じゃあ妖術は?」

「そうだな。その妖怪の個性…言ってしまうえば自己証明だ」

そもそも、妖力は妖怪のような人外しか持たない力だ。妖怪によってその力の性質は違う。紫様のちよつと変わった性格が『境界を操る程度の能力』を発現させているし、ルーミアという妖怪も神出鬼没で何も考えてい…フワツとした気質が『闇を操る程度の能力』を発現

させたのだろうか。

「あ、あのー藍さん？」

「む、すまない。靈法と魔法の違いだったな。靈法は主に東洋の魔術のことであり、古くから悪霊や妖怪を鎮めるための儀式や法術が多い。幻想郷に住む多くの人間が霊力を持っており、人里のほとんどの退治屋はこれを用いて妖怪と戦っている。博麗の巫女もこの力を使い、妖怪がしでかした『異変』の解決をしている」

もう少し説明すると、式神や護符など紙に神仏の名やまじないを記した物など0から1〜10を作り出せる物が多い。決して手軽な物ではないが、力のある人物が作った護符は強力な除霊効果を持つ。

「続いては魔法。魔法は西洋の魔術のことであり、魔力を用いて様々な奇跡を起こす。特殊な効果をもたらす薬を製作する魔法薬学、相手を呪う黒魔術や呪文、天文学や数などで人の将来を暗示する占い、卑金属金属元素以外の元素のこと。から貴金属金属のうち化合物をつくりにくく希少性のある金属の総称。を生み出す錬金術…」

海堂は目元を擦り、フア〜とあくびをする。

「つまり、魔法は万能だ。火を生み出し、水を荒らし、風を吹かせ、大地を暴れさせる。今でも外の世界で人知れず普及しているな」

「え？魔法って幻想郷だけじゃないの？」

「正確には魔術だがな。そこらへん間違えるとその界限の人間になんか言われるぞ」

「こんなところか…」

藍は魔道書を閉じて海堂を見る。ギリギリ起きているが、今にも眠りそうな顔をしている。

「さて、今日はここで終わりだ。片付けはしておくから布団を敷いて寝ろ」

「…はい」

海堂はゆっくりと立ち上がり、ふらふらと部屋を出ようとする。

「あつ、藍さん」

海堂は突然足を止めて、藍の方へと振り返る。そして、こんなこと

を聞いてきた。

「もしも、人間同士が殺し合いをするとして、勝つのは靈法？それとも魔術？」

そんな質問に藍はちやぶ台に肘をつき、手の甲を額に乗せる。靈法と魔術は似ているようで似ていない。藍は妖怪であり、その昔人間と戦った。靈法は悪霊や妖怪にとって弱点だ。しかし、人間同士となると妖怪である自分では結果はわからない。ただ、何となくあの少年を思い出した。

「私は妖怪だ。人間と戦ってきて、最も手を焼いたのはいつだって靈法だ。だが、人間同士となると：魔術が勝つかも知れない」

「……」

海堂は閉じかけていた目を開いて、もつと聞きたそうに藍を見る。

「いや、この話は長くなるからまた今度話そう。紫様も含めて：：な」

「えー？：：込み入った話か？」

「そんなところだ」

海堂はブーと口をタコにし、改めて部屋を出た。

ここは八雲家。幻想郷のどこかにある管理者の住居：：

第一話 私は元気です

あれから数ヶ月の時間が流れた。博麗の巫女は教育を終え、八雲家ではスペルカードルールの施行が計画された。しかし、相変わらず妖怪は元気いっぱい、人里幻想郷において、人間唯一の居場所である。この作品では東京ドーム数個分といった曖昧な大きさをしている。もピリピリしがちな状況には変わりない。

さて、そんな状況で我らが海堂は…

「よし、やるぞー！」

「「「はい！」「」」」

寺子屋の教師をしていた。

時間は遡り、約二ヶ月前のことだった。

「え？人里に？」

「そうよ。時期も来たから貴方には人里で生活してもらおうわ」

藍から専門外ながらも魔法使いとしての勉強も一区切りつき、八雲家での仕事も板について来た海堂は紫から人里に行くことが命じられた。

「いつまでもここで仕事させとくわけにもいかないのよ。この数ヶ月で貴方も妖怪を相手取れるほどには成長したからね」

「そうですか。んで俺は人里で何すればいいの？」

「それは内緒よ♪」

「ええ…」

紫が扇子で口元を隠しながら海堂に笑みを向ける。その笑みは加虐性が含まれた笑みだった。すると、襖が開き藍が室内に入る。藍はため息を吐き言う。

「海堂をあまりイジメないでください。要するに幻想郷を知ってもらいたいのでしよう」

「あら、勝手に種明かしとはえらくなつたわね、藍」

「紫様はいつも回りくどいのです」

「はあ…」

海堂は授業を終え、深く息を吐く。すると教室に女性が入ってくる。腰まで届くほどの銀髪、頭には赤いリボンつけ、服装は袖が短い上下が一つに合っているスカートのついた青い服だ。

「お疲れ様だ。どうだ？…この生徒は？」

「元気がよろしいこと…アンタすげえよ」

彼女の名前は上白沢慧音^{かみしらさわけいね}。海堂を雇った寺子屋の主人である。ちなみに彼女の授業は難解で退屈との噂だ。

「君もだろう…この後も仕事があるのだろうか？」

「はい。次は大工で、最後は鈴奈庵で木板印刷の手伝いです」

「…」

慧音は呆れたように海堂を見る。妖怪の賢者から言伝があつたとはいえ、この女…いや男は異常だ。

急に万屋という名の何でも屋をやり始め、里の皆が不審な目で見たとさえ思えば、依頼される仕事を次々とこなしていった。力仕事、料理、巡回、経理、子守、教師…マジでなんでもやってのけた。人間からは「労働力が手足をつけて歩いてる」

「万能の人」

「究極の下っ端」

なんて呼び名がつき、最終的には「ヨロズ」という愛称ができてしまった。

「普通だと思いがな」

「普通の間人は木板印刷なんてできないし、妖怪だつて倒せない」

「…そーいや、ホムンクルスだった」

「分かればよろしい。それにしても、君は目立ちすぎだ。君の主人からも言われてるのだろうか？」

そう言われ、海堂は口を膨らませ、ムツとする。

人里の中で海堂の身体を知っているのはこの人里の名家『稗田家』の稗田阿求^{ひえだあきゆう}と現在海堂の目の前にいる慧音だけである。

「あまり無茶はしないように。特に鈴奈庵はほどほどに仕事する」と

「木板印刷楽しいですよ」

「それは意味わからない」

side change 海堂直也

仕事も終え、すっかり夜になってしまった。万屋を始めて二ヶ月になるが稼ぎはぼちぼちだ。全財産は大体20円この作品では一銭が現代でいう200円ほど、1円が2万円ぐらいの価値があるほど。一仕事10銭くだからそこそこだろう。

寺子屋：正確には稗田寺子屋っていうけど、たまに慧音さんが蕎麦を奢ってくれるし、鈴奈庵では本を割引で貸してくれるから生活には満足している。紫さんの『幻想郷を知る』という目標は全然達成できてない。

ちなみに最近気づいた事なんだけど、ここの言語は元の世界の日本語と同じだけど文字に関しては違うというか古い。

魔法でなんとかはなってるけど読みしかできないから、近頃の日課は夜遅くに読み書きの練習をしてる。

さて、今日はお金もあるし居酒屋にでも行こう。魔法書の勉強きついんだよな。

あと何で慧音さんは呆れた目でこちらを見て来たんだろう？

side reset

居酒屋『眠羊^{みんよう}』人里でも有名な居酒屋の一つだ。そのマスターはグラスンをかけた外来人に酒を教えてもらい、人里に西洋酒をもたらしした最初の店でもある。店の特徴として様々なお酒を提供するが、特にラムコーク通称『キューバリブレ』ラム酒をベースとしたカクテルの一つで一番古いカクテル。第二次キューバ独立戦争の合言葉に因んで作られた。に命をかけているとの話だ。内装は狭いが、モダンな

洋風でテーブルとカウンターがある。

海堂は一円札を3枚握って中に入る。テーブル席からは若い男が四人でドロドロした恋の話が繰り広げられていたので、海堂はカウンターに座ることにした。

「ご注文は？」

「カシスオレンジ」

「…ご注文は？」

「うっ…オレンジジュース」

「かしこまりました」

言っておくが海堂はまだ19歳だ。幻想郷に現代の法律は通用しないが、マスターも弁えている。お酒は20歳から。少しすると海堂の前にグラスに入った明るい橙色の飲み物と小皿にもられた焼き菓子が出される。

「ん？コレ…」

「サービスです。皿洗いのお礼です」

「はあ、ありがとう」

海堂は出された菓子をサクサクと音をたて食べる。すると隣に座っていたフードの男が声をかけてきた。

「嬢さん見ない顔だな。海堂…だっけな」

「…なんだ？ナンパはごめんだ」

「人間に興味はない。すぐに死ぬからな」

「…アンタ名前は？」

男は少し間を置いて言う。

「にいそくてつや新速哲也だ。また会おうホムンクルス」

「な!？」

驚いて、海堂は彼のいた方を向く。しかし、すでにそのばを後にしていた。

結局お酒は飲めず、変な奴に会ってしまい気分が少し悪くなってしまった。海堂はやることも無く、夜も更けてきたので自宅に帰ることにした。

海堂の家は他の家と比べると少し大きめだ。まあ、万屋を兼ねているため、店としてはかなり手狭だが、話を聞くには困らないし、魔法の勉強もできる。生活するには不便なことはない。海堂は家の前に置いてある掲示板をチェックする。いつもは寺子屋や鈴奈庵で働いているのだが、万屋としての仕事は基本的に依頼書を書いてもらっている。

流れとしては『大まか依頼書提出↓やるorやれないの判断↓』やる』場合は室内に入って相談↓実行↓報酬

『やれない』場合はごめんなさい

と言う感じだ。さて、本編に戻ろう。

海堂は掲示板に何も貼り付けられてないことを確認すると、そのまま自宅に入る。少し狭い応接間の奥にはちゃぶ台と座布団が敷かれた寝室がある。海堂は寝室に入って布団を敷く。そのまま寝てしまおうとしたが、ふとちゃぶ台に目をやると、無造作に茶封筒が置かれていた。

「なんだこれ？」

海堂は茶封筒の封を破り、中に入っている手紙を読む。その内容に海堂は冷や汗をかいた。

「知ってもらおうって…そう言うことかよ」

依頼書 『八雲紫の従者』海堂直也に命ずる。魔法の森を調査し、その場所の近況を報告せよ。 詳細は翌日に『八雲紫』

第二話 戦いの基本は手札の確認から

太陽が上り朝が来る。農民はせつせと働き始める頃合いだ。太陽が出てゐる間は妖は活力を失う。もちろん全ての妖怪に当てはまることではないが、それでも人間が人里以外を歩ける唯一の時間だ。

故に幻想郷の人間は朝方の人間が大半を占めている。夜の間は里の外はもちろん、里の中でも妖怪による拉致が発生する可能性がある。一度拉致された人間の末路は言わなくてもわかるだろう。

それは海堂も例外ではない。7時半起きが5時半起きになった。海堂は起きると、寝巻きを脱いで和服に着替える。あとは顔洗いやら歯磨きやら朝のルーティンがあるのだが、語っても面白くないので割愛。

主人の依頼が最優先なので万屋は当分の間はお休みである。

しばらくすると空間にスキマが出現し、そこから藍が現れる。

「起きていたようだな海堂。それにしても窮屈だな。少しは片付けをしろ」

藍は机に積もり重なった紙束を見て言う。海堂はそれに頭をかきながら答える。

「それ全部書類なんですよ。決算やら税金やら新聞やら…藍さん何とかありませんかね」

「八雲が関わっていることは隠さねばならぬからな。助力はできませんまんな」

「幻想郷のために…でしょ？まあ一番大切な物を失うかもしれないが」

「それを防ぐため我らがいるのだろう？」

「そうですね…まあやれるだけやってみますよ」

右手をグツと握って親指を立てる。海堂が最近よくやる仕草だ。藍はそれを流して応接間の椅子に座る。

「さて本題に入る。手紙は見たな？」

「はい。魔法の森の調査ですよ」

「そうだ。と言っても主人の従者として幻想郷の見聞を深めるのが目

的だ」

「なるほど…やっぱ危険ですよね？」

「妖怪は普通にいる。お前は関係ないが毒の瘴気も漂っているから楽とは言えんな」

魔法の森は幻想郷でも比較的安全な方だ。化けキノコの瘴気は危ないが、居座ってる妖怪は弱い。ルーミアがたまにうろついていることがあるが、夜でもない限り大丈夫である。

「そういや、魔法の森に何しに行けばいいんだ？」

「ルーミアを退治しろ」

「なるほど…え？」

藍の突拍子もない返しに海堂は思わずフォントを変える。ルーミアと言ったら幻想郷縁起にも書いてあるほどの妖怪だ。『なのだ』のイメージが強いが実際は明確に人喰いと描写されている。海堂は彼女に喰われかけたのだから動揺は避けられないだろう。

「大丈夫だ。死んでも骨は拾う」

藍は腕を組んで笑顔でそんなことを言う。正直洒落になってない。「お前ならいける。むしろルーミア如きで挫けられると困る。では私は戻るからな。しっかりと励め」

「…はい」

そんな感じで藍はスキマへと戻っていく。海堂は机に突っ伏して考える。

ルーミアは『闇を操る程度の能力』を持っている。この能力により日中でも活動ができるのだ。能力を発動すると自身を中心に闇を展開し中に引き込まれる。引き込まれたが最後妖怪の持つ怪力によって痛めつけられ…抵抗ができなくなったところで生きたまま食われるだろう。

腕、足のあとは腹を裂いて内臓は引っ張り出し…海堂はこれ以上考えないようにした。エログロは流石に守備範囲外だ。

しかし、能力発動中は自身を覆うように展開するので自分も闇の中で離れていれれば見えないのである。距離をとって遠距離で戦えば十分に勝機はある。それに海堂は使える魔法は魔力を球状にして放つ

物と身体能力を上げる物が中心だ。

「…意外といけるかも？」

うろ覚えなルーミアの顔を思い浮かべながら落書きをする。何とも陳腐な絵が出来上がった。海棠は頬をパチつと両手で叩いて覚悟を決め、家を出る。

向かうは魔法の森。ルーミアとの戦いに臨む。

第三話 一寸先は闇の中

「ハア…ハア…」

海堂は木にもたれ掛かり自分の腹部に目をやる。そこから自分の血が溢れていることに気づき患部に手をあてがう。痛覚はほとんどないがそれでも自分の体に穴が空いているという事実^{じじつ}に精神をすり減らす。

背後からの弾幕。それがこの怪我を作った要因だ。そしてその攻撃には心当たりがあった。魔法の森には妖怪の類はあまりおらずいても『毛玉』『狼』『大百足』といった力はあるが知性の薄い者ばかりだ。妖精はいたずらをするが人ではない自分には関心を向けられない。悲しいね。

さて、海堂を攻撃した者が姿を表す。黄色の髪、白と黒の洋服とロングスカート。そして血に濡れてような赤い瞳。幻想郷に迷い込んで出会った最初の妖怪。ルーミアが立ち塞がった。

「うーん。姿は違うけど…久しぶりね。海堂♪」

ルーミアは宙に浮かびながら獲物に舌なめずりをする。もちろんここで言う獲物は海堂のことだ。

「不意打ちなんて卑怯だぞ…」

「何言ってるの。元々はアイツが邪魔しなきゃあなたを食べるつもりだったの〜！まあそんなことも忘れてノコノコやってくるとは思わなかったけど」

ルーミアにいつもの笑顔はなく顔を顰め忌々しいように口を開く。ルーミアにとっては一度見逃した獲物がもう一度やってきたのだ。一方、海堂はこのまま話をして時間を稼ぎ体が治るのを待っていた。「アイツ…やけに嫌ってるな。イオだっけ？」

「…ッ！吹けば飛ぶような弱い人間の癖にあの態度…嫌いなわ〜！もちろんあんたもね！」

ルーミアは海堂に向かって手を突き出し水色の球体をワイドに撃ち出す。海堂は自分の体が修復したことを確認すると左に横っ飛びしてながらサッカーボールサイズの赤色の球体を撃ち出す。

「も〜きつさとやられる!」

「断る!きつさとぶつ飛ばされる!」

海堂は作戦通りにルーミアから距離を取りながらルーミアを視界に入れる。ルーミアを軸に移動すれば攻撃をされても対処が容易だ。ルーミアもそれに気がついたようでふらふらと振り子のように飛び、海堂の出方を探る。

さて、ここで少し解説を。人間と妖怪の戦いは基本的に妖怪が有利だ。里の人間博麗の巫女などの例外はあるでも霊術や魔法を扱えるが人間としての存在を保ったまま妖怪と正面切って戦うのはほぼ不可能だ。しかし海堂はホムンクルス。一応人間ではないのでやろうと思えば妖怪に近距離戦に持ち込める。しかしここで障害になるのがルーミアの能力。至近距離で展開されるといくら海堂でも周囲が見えない状況で戦うことはできない。

近寄ることが容易ではないと理解したルーミアは5点バースト弾幕を主軸に物量で圧倒することにした。激しくなる弾幕を前に海堂は思考を加速させる。

海堂は迫る弾幕を木々の影でやり過ごし撃たれた方向に手向けると円状の魔法陣が現れ、第二の弾幕『レーザー』を放つ。

「んな!」

ルーミアは木々を薙ぎ倒し突き進む光を驚きながらも回避する。

海堂はすぐに2回目を放つ。しかしこれも交わされていく。

「どうするか…このままじゃカラになる」

海堂は思考を加速させる。海堂の魔力も無限ではない。このまま戦えばこの体を動かす魔力が無くなって動けなくなる。海堂はそれだけは避けなければならぬ。空を飛ぶ魔法は使わず肉体強化で身体能力を向上させてルーミアに食らい付いてる。しかし相手は常時空を飛んでいるので距離を取るのも精一杯だ。長期戦は不可能。近接攻撃は悪手…しかし勝機は見えている。

海堂は右手にバスケツトボールほどの大きさの球体を作成する。それを愚直にルーミアに向かって撃ち出す。打ち出されたそれは決して速度が速いわけでもない。ルーミアは今までどうり回避を試み

る。その瞬間だった。

「弾けろ！」

「!?」

海堂の言葉に合わせて球体が炸裂。クナイの形をした弾幕がルーミアを襲う。突然の奇襲：だがルーミアとて名のある妖怪これをギリギリで交わす。しかし続いて予測するようにレーザーが襲いかかる。連続攻撃にルーミアはマトモに喰らいはしなかったもののこれが初の被弾となる。

「……このお！」

ルーミアは頭上に青色の妖力の球体を作り出しそこからレーザーの飛んできた方向に緑と青の連続ワイド射撃を放つ。周囲を薙ぎ払うその弾幕は避けるのは困難。ルーミアにもはや食事のことを考えてはいなかった。

しかし海堂の方が一枚上手だった。

「喰らえ!!」

ルーミアの背後から海堂の声が聞こえてくる。ルーミアの背中に衝撃が走り闇を操る妖怪は地面に叩きつけられた。

第四話 勝利と作戦と…

海堂のとった作戦は単純明快。とある漫画をもじりながら表現するなら『隙を生じぬ三段構え』。

最初に撃つたのは第三の弾幕『分裂クラスター弾』。一つの球体が途中で破裂して小さい弾を生み出し、狙った敵に向かって飛んでいく。ルーミアとの戦いではまだ見せていない弾幕なので彼女が動揺する。そしてすぐに相手が回避した方向を予測してレーザーをわざとらしく撃つ。

レーザーはそれ単体で使うには派手すぎる。発射音もそうだが今回の森のように障害物を破壊する音を鳴らしながらでは必ず避けられてしまう。

そのため最後にとった行動はルーミアの背後までかつ飛んでいくこと。空を飛ばなければ魔力漏れによる感知はなく。レーザーの爆音によって海堂の風を切りながら走る音を消せる。

少し懸念していたのが自分が撃つたレーザーに被弾することだったがそんなことも起こらなかった。後ろまでかつ飛んだあとはルーミアの背中に蹴りをかます。それが海堂が22秒で考えた作戦の全貌だ。

「ぐたく」

ルーミアは海堂の蹴りをモロに喰らって目をぐるぐる巻きにしている。さながらばたんきゅんという言葉が似合う姿だ。とても人喰い妖怪とは思えない。

さてここで海堂は考える。何をもちって退治となるのか？妖怪は人間を喰らい人間は妖怪を倒す。しかし今の自分は人間と言えるのだろうか？

「そーいや…紫さんに人造人間てっ言われてたなあ…うーん」

頭をかきむしりながら目を『ーー』にする。すると聞き覚えがある声が聞こえてくる。

「おい！そこで何してる！ニンゲ…ん!？」

海堂は声がる方向に顔を向ける。すると幻想郷初日ルーミアの

次に会った人物。イオがそこにはいた。確かイオはナワバリに来た人間を殺すと言ってた。幻想郷縁起でも魔法の森の最奥地は行つてはならないと注意書きがあったほどだ。しかしここはそこまで深いところではないはず。この少年は何しに来たのだろうか。

「イオ：なんでここに」

「やっぱ海堂か：ここには定期的に巡回しているだけだ。退治屋を見つけて追い払ってやろうとな」

「あれ？アンタ人間は殺すだろ」

「ナワバリはな。ちゃんと区別はつけてるつての。横取りここでの意味は獲物の横取り。一度狙った獲物は責任持つてぶつとばせもしねえし」

イオは海堂の質問にめんどくさそうに答える。そして少年は思い出したかのように目を見開く。

「そうだった！オレが聞きたかったのはアンタの体についてだ」

「何？別になんもしてないよ」

「何を想像してんだよ。あのな？その体は…」

イオが何かを話そうとすると急に彼の体がぼやけていく。海堂はその光景にギョツとする。こいつギョツとしてばっかだなおい。

「ヤベ！すまん。明日の正午に奥地まで来い。続きはそこでする」

「あの、ルーミアは？」

「ZZZZZZ」

海堂は未だ倒れているルーミアに目をやる。気絶どころか気持ちよさそうにぐっすり熟睡していた。

「好きにしろー！じゃあな！」

イオは海堂にルーミアのことを丸投げした。このままほつとくのもアレなので連れて帰ることにした。

「にしてもこいつスヤスヤ寝てんなあ〜まじで見かけは人間なんだよな」

「お母さんと子供を一緒に食べて：親子丼〜」

「フウ〜：俺の人生で最も酷い他人の寝言ランキング一位だなりや」

その後も海堂はルーミアから繰り出される衝撃的な寝言を聞かされながら人里まで戻って行った。

海堂直也

対

ルーミア

決まり手

『飛び蹴り』

第五話 帰宅、そして説教 前編

「さて、どういうことか説明してもらおうか」
「…」

藍は海堂を正座させる。その奥ではルーミアが縄で縛られ札をありつたけ貼り付けられてる。

「…あのー」

「ん？どうした？」

藍の顔はとても健やかな笑顔だ。海堂にとってその笑顔は恐怖でしかなく思わず冷や汗をかく。しかしその重圧を切り抜けて口を開く。

「えっと、その…あの…」
「…」

何か弁明しようともその言葉が何も出てこない。そんな自分に海堂は心がキュウと締める感覚に襲われる。喉がヒリヒリと乾いていきだんだんと目の前が白くなっていく。顔面蒼白な海堂を見て藍はそろそろ場を緩めにかかる。

「…海堂？」

「は、はいー」

「なぜこんなことになってるかわかってるか？」

「ルーミアを…妖怪を連れて帰ったから…」

人里は妖怪禁制の場所だ。むしろそこにしか人間の居場所がないのでそうなるのも当然だ。そんな所に野生の妖怪なんぞ連れて行ったら追放処分を受けるか悪ければ処刑ぶっちゃけ処刑なんてよほどのことをしない限り、起きないので気にしなくていい。される。

「まだ、そいつの顔が割れていなかったから良かったが…」

「あああ…あああ…」

海堂は頭を抱えて震える。自分のしでかしたことはでかい。彼はどんな処罰でも受けるつもりだが相手は妖怪なので普通の罰が降るわけない。

一方藍も困っていた。まさか海堂がこんなアホみたいなことをす

るとは思わなかったからだ。退治しろと言われて退治せず連れて帰ってきた時は持っていた筆を落とした。ここで処罰を与えるのは簡単だが、また同じことを繰り返すことを考慮するとなると罰に意味がなくなってしまう。

藍は一つ呼吸を入れて海堂と顔を合わせる。

「処罰は後で決める。なぜこんなことをやったのか説明してくれないか？」

それを聞いて海堂は目を見開く。しかしすぐに俯いてしまった。何か隠し事をしていると藍は推測して、続け様に問いを投げかける。

「…そうか。言いたくなければそれでいいが」

「…その答えは少し待っててもらえないか？」

「ほう、わかった。だが近いうちに聞かせてもらおうからな。その代わりしつかりルーミアを森に戻してこい絶対だ」

藍は戸から外に出て姿を消した。そして万屋には正座したままの海堂と縛り付けられたルーミアだけが残った。

――
日が登って新しい朝を迎えた。今日も万屋休業していた。海堂は役所からの書類に目を通し筆を走らせる。

税に関する書類を書き終えたタイミングで裏口の戸万屋には裏口があり入るのが少しめんどくさい。誰にも気づかれず入ることができるので、しかし何か後ろめたいことがある人間、いてはならない妖怪などがよく使用する。が聞く音が聞こえた。海堂は書類を綺麗に整える。

「カイドー。久しぶりー」

現れたその少女は緑の帽子に茶髪のショートヘア、リボンが付いた赤と白の長袖のワンピース服、頭には猫耳とピアス、そして二本の尻尾『猫又』が生えている。

明らかに人間ではないその少女の名前は『橙』^{チエン}。八雲藍の式神である。海堂に向けるその笑顔は少女らしい健やかなものだ。

なお当の海堂は何処か嫌な予感を感じ取り口元に力が入る。橙は一体何しに来たのだろうか。

↳ 後編へ続く

第六話 帰宅、そして説教 後編

海堂は少し橙に苦手意識を持っている。橙は八雲藍の式神なので言うなれば式神の式神である。

そんな感じで今まで八雲の立場関係は『八雲紫』↓『八雲藍』↓『橙』という分かりやすい関係だったのだが、ここに海堂が紫の従者として加入したことにより、そこらのへんの関係が曖昧になってきている。

海堂本人は一番下だと思っているが橙は結構気にしてらしくかなりの頻度で突っかかってくる。恐らく彼女の主人である藍が最近現れたぽつと出の海堂に構っているからだ。

橙はなんと捉えていいのかわからない笑顔をして海堂を見つめる。そんな視線を向けられてる海堂は冷や汗をかいていた。

「何しにきたの?」

乾きに乾いた唇を湿らせ橙に問う。

「ソー?長い間その顔を見てなかったから見にきただけ」

「そ、そうか。お茶でも出そうか?」

「あつ、よろしくね♪」

海堂はこの前人里の茶屋茶屋(ちゃや)は、日本において中世から近代にかけて一般的であった、休憩所の一形態。休憩場所を提供するとともに、注文に応じて茶や和菓子を提供する飲食店、甘味処としても発達した。茶店(ちゃみせ)とも言う。へ出典:ウィキペディアより抜粋

人里の茶屋では茶葉の販売も行っている。で買った緑茶の茶葉を急須に仕込みお湯を入れる。しばらくして出来たものを湯呑みに汲んで橙に出す。

「で、マジで何しにきたの?橙さん俺の事嫌いでしょ」

「そんなことないよ、アチ!...ただ私は藍様の式神として悪い虫が近寄らないようにしてるだけ」

橙は出されたお茶に舌を火傷させながらも海堂の質問に答える。内容はあれだが。

「その悪い虫俺の事だよな?」

海堂が問いたですと橙はハハハと笑い出す。

「大丈夫。納得はまだしてないけど流石にもう学んだから。それに藍様は同性愛者でもないもんね〜」

「そうだ！俺女だった…っておい！藍さんに恋感情は向けてないって！」

「そういうのって大体向けてる人間がいう言葉なんだよ？喰われないの？」

そう言うのと橙の目からハイライトが消えて口がほんの少しだけ開かれる。そこには肉を噛みちぎれる鋭利な歯と血で濡れたような真っ赤な口内が広がっていた。

「喰われることで無実が証明できるなら喰われてやってもいいけど死んじやうからだめ。てか本当に何しにきたの？」

「実はね…藍様の命令で万屋で海堂を監視…見守ってくれと頼まれたのだ。本当は嫌だけどね」

「あらら、藍さんの命令か。てかいいの？猫の里山奥にある廃村に猫を集めて、猫の里を作ろうとしている。しかし、手下の猫はあまり橙の命令を聞かず、うまくいっているとはいえないはどうするの？」

「うまく行かないからとりあえず保留？保留であつてるかな。やり方考えてるからしばらくは暇なの」

海堂にとつて橙が入ってくるのは予想外だが、色々な事を任せれそうなので受け入れることにした。問題はしっかりと言うことを聞いてくれるかどうかだが、藍さんの命令なら大人しく聞いてくれると思う。

「じゃあ早速今日の昼から行かないといけないから留守番頼めるか？」

「何しに行くの？藍様に報告しなきゃいけないから」

「今から退治屋の道場で稽古して、その後魔法の森でイオに会いに行く」

「へえ、アイツに会いに行くんだ。あつルーミアの話だけど…」

「じゃあ俺行ってくるから！」

橙から昨日の話を掘り下げそうになったのですぐに家を出た。橙は逃げるように出かけた海堂を見てため息をついたとき。

第七話 可憐なる退治屋、超えるべき壁

幻想郷の人里には様々な職業がある。しかし中でも特異なのはやはり退治屋だろう。

基本的には博麗の巫女という絶対的な存在がいるのだが、いつどこで妖怪に襲われるか誰もわからない世界である者は自衛のために、またある者は家族を守るために、またある者は人里を守るために、それぞれ目的は違えど力を求める者として手を取り合う。それが人里にとっての退治屋であり生まれたのが警護隊という組織が生まれた。

海堂が向かっている所は警護隊の道場でそこには戦いで鎬を削っている人間がチラホラ見受ける。だがこの日は一人しかいなかった。その剣筋は流れる水の様で見たものを魅了する。その者の名は『高橋桜』警護隊の切り札とも呼ばれる少女である。

「おはようサマンサー！」

「おはようございます」

海堂は元気に白髪で目隠ししてそんな最強の人の挨拶をするが、帰ってきたのはか細い声。しかしその顔は海堂に向けていた。彼女は無口な性格タチなので彼女の周りには友人は少ない。たまに霊夢と一緒にいるのは見るが。

「じゃあやるっ？」

海堂は木刀を手に取り桜に声をかける。桜は何も言わないがコクリと頷き木刀を構える。海堂は剣先を桜に迎え中段の構えをとった。両者が床を踏み距離を詰める。両者の剣がぶつかり合いそのまま鏢迫り合いになる。

「クッー」

「…」

海堂は弾き飛ばされ少し体勢を崩した。その隙を見逃すはずがなく桜は一気に距離を詰め怒涛の斬撃を繰り出す。海堂はこれを神がかりな反射神経…ではなく『危険察知』自身もしくはその周囲の人間の危機を察知する能力。必ず発動するとは限らない。なお、未来視ではないので、危険が来ることはわかってても何が来るのかはわからない

い。〈第一章キャラ紹介より引用〉で桜の攻撃を感知してあとは根性で防いでいる。だが練度が低い！攻撃を受け流すのではなく木刀で防いでいるため手は段々痺れて上手く動かせなくなっていた。

「……」

「うわー！」

上からのやや大ぶりな一撃。しかし今の海堂に防げるわけもなくそのまま頭に木刀を食らった。

「イッタタタ……」

「……」

頭を押さえてその場に蹲る海堂。そこにどこから持ってきたのか桜は大きいタオルのような物を差し出す。桜に礼を言ってからそれを手に取る。ヒンヤリと濡れていた手拭はジンジンと響く頭にとてもよく効く。海堂は顔をコメ食いてー顔別名『でもやせたーい顔』ウ●娘のライブ『うま●●伝説』の曲中に登場する顔。どんなキャラでもその時はいかにも米を食いたそうな顔をしている。を惚ける。

「フウ、いつもありがとう桜さん」

「かわまない。こつちも修行になるから」

「いやー。それ聞くと嬉しいなあ」

桜の声はかなり低いがちやんと聞き取れている。ここの門を叩いて一ヶ月と14日。最初はちんちくりんだった剣の腕も玄人ぐらいには成長した。元々妖怪との実戦経験があるにはあるし学習速度も速いのでこんな感じである。

しかし桜も負けてはいない。人里の切り札とか言われているがまだ16歳という若輩である。ちなみに桜ほどの実力を持つ退治屋はいるが大体は50〜60代しか居ないと言えば彼女が剣の天才であることにケチはつけられない。

桜は『霊力魔力と同じで術など技を使うときに必要なエネルギー。人里の人間のほとんどは霊力を持つ。博麗の巫女も霊力を扱う。霊力で発動する陰陽術は個人の向き不向きが左右されにくいので汎用性が高い。』扱うことができる。持っている武器に霊力を纏わせて強度や切れ味を強化はもちろんのこと斬撃を飛ばせるようにしたり、霊

などの実体を持たぬ敵を切ることができるようになる。海堂ほどではないが身体強化もできる。この力と並ならぬ努力が今の桜を作っている。

ちなみに道場の稽古では剣術や戦いで読み合いを重視するため彼らは魔力や霊力は使わない海堂の危険察知は例外。

「じゃあ、そろそろ行きますね。またお願いします」

「うん。またやろうね」

海堂は魔法の森の約束を思い出して桜に挨拶をして道場を去る。桜は少し名残惜しそうに海堂を見送ったあと再び修練を始めた。

Side change 海堂直也

魔法の森奥地。そこは朝、昼、夜とどんな時間帯でも暗く湿った場所。俺はイオとここで会うことになっていた。別に放っておかれたというわけでもない。正午ピツタシにあいつは現れてあいつが住んでいるという場所まで案内された。

：最初はボロ屋が見えてきて「嘘でしょ…」とも思ったが中に入っ
てびっくりだった。どうやったら廃墟同然の家が洋風で落ち着く部屋になるんだ？あいつはなんとか魔法とか言っていたが何一つ理解ができなかった。

それであーだこーだあって…

「じゃあ一本やるか！カイドオー！」

イオと模擬戦をすることになった。

「…なんで!?!」

時間は少し遡る…

Side Reset

「どうした？そんなソワソワして？」

「い、いやー。だってさあ」

海堂はイオが住んでいる家の内装が原因で落ち着いていなかった。

内装はじっくりくつろげるように作ったとイオは言うがいかんせん外見とのギャップが激しく海堂の脳が今納得するのを拒絶している。そんな海堂を見てイオはため息をつく。

「だっていやだろ？何が悲しくって冷たい床と薄い布で寝なきやいけないんだよ」

「豪勢すぎるんだよ！魔法とかでなんとかした（キリッ）なんて言われでも納得出来ねえよ！」

「でもベツトじゃないと寝れない。それにミュウがぐちぐち言うし…」

「ミュウ!?誰だよ!」

イオは海堂の質問に無視して話を切り替えた。

「そうだ、今更遅いけどあんま大きな声出すな。オレの今の主人が寝てるから」

「んなあ?なんで?」

「ちよつとした精神病だ。そのうち治る」

海堂は寝室の方が気になりながらもいつの間にか出されていたお茶を飲む。そのお茶が紅茶であることに気づき海堂は顔を渋らせる。

「これ紅茶?」

「そうだ。ということはお前も日本茶派閥かよ。んじゃ本題に入るか」

イオが紅茶派がないことを残念に思いながらも話を始めた。

「今日ここに呼びつけたのはお前さんの事についてだ」

「何?ナンパ?」

「誰がTS少女と付き合うか。お前ホムンクルスだよな?」

「あ、ああ。なんで知ってんだよ」

海堂のもつともらしい質問にイオはしげしげと海堂の体を見てながら答える。

「今の時代そのレベルのホムンクルスなんて作れねえよ。どこで手に入れた?」

「知らない。言いたくない」

「ふーん。まあ大事にしてやんな!」

「そんなに凄いのか？」

海堂の言動にイオは大袈裟にリアクションを取る。その後説明を始めた。

「えっと、お前さん魔術s…いや魔法使いだろ？ホムンクルスについて勉強した？」

「かじった程度。錬金術の一種だっけな」

海堂は藍から教わったことを思い出す。蒸留機に様々な素材を入れて腐敗させたものを様々な工程を踏んで作成する物だ。海堂の解釈では魔術的工程を使用し人間モドキを作るという感じであった。

イオはおもむろに右手でナイフを取り出し机に置かれていたリングを手にとって皮を剥きながら口を開く。

「まあそんな感じだ。だが、さっき言った方法は意思を持つホムンクルスの作り方だろ？意思を持たない空っぽな肉体なら同じくらい手間で色々盛り込めるのよ。例えば…」

その瞬間、林檎の皮を剥いていたナイフが一瞬に消える。海堂は咄嗟の出来事に反応できずそのままナイフで頬を切りつけられる。ヒリツときた痛みには海堂は頬を押さえる。

「魔力が流れている限り軽傷ならすぐに治る」

「イター！何するんだよ！」

イオの言っていたとうりに頬の傷は治る。しかし海堂は頬を膨らませた。せめて一言かけても良かったんじゃないか？そう発言したが、聞き入れてもらえそうにないのでその反論は心の中に仕舞い込む。

「てか、本当に不思議だ。ずっとその体はお前さんを待っていたと思わず感じてしまうほど馴染んでるから…：そーいやルーミアとやり合ったんだよな？」

「ああ。あれは大変だった…」

海堂は頭を掻きながら言う。その言葉を聞いてイオは少しニヤついていた。

「じゃあ一つお願いなんだが…」

先程の経緯を踏まえて、ありのまま今起こったことを話すと自分の体の事を話していたと思っただらいつの間にか戦うことになっていた。「なんで!？」

「折角じゃけな。おまんの強さ見とこおと思っただんじやき」

イオの言葉使いが変わったというよりか各地の方便が混じっている。標準語キツチリ話すのがめんどくさくなったのかわからないが、ただ一つ言えることは彼は海堂と戦う気マンマンということだ。

「待て！俺は素手だぞ！丸腰の少女をボコボコにするつもりか！」

「んーそやおのお。分かったこの木刀貸したるけえ」

そう言うも持っていた木刀を海堂に投げ渡す。

「それだと今度はイオが丸腰だろ？」

「ああ、心配はよか！」

ニコツと笑ってそこらに落ちていたいい感じの木の枝を見つけて拾う。イオはその枝を何回か振ると長さ五十センチほどの白い棒が出来上がった。海堂はその現象に目を疑う。

「まさかそれ武器だよな？」

「当たり前やろ！こんぐらい出来んと退治屋追っ払い続けることなんかできるわけなか！ほんじや始めると」

その合図で2人の場は一瞬にして引き締まった。海堂は朝と同じように中段に構える。一方イオは左手を腰に当て棒を持った右腕でふらふらと遊ばせ構えの姿勢をとらなかつた。

「なんやそれ？かたっ苦しい構えやな」

「お前こそなんだその構え。人の事言えないだろ」

「はっ！武器向けてる時点で構えは成立するんやで。覚えとき！そろそろ喋るのも飽きてきたなあ」

瞬間。イオが消える。それと同時に危険察知が発動し海堂は右に体を向ける。剣閃が走り白い光の線が後を残像を残す。光速と言っても過言ではない剣閃を海堂はかろうじて防いだ。

「ウツ……」

「甘い」

そこから繰り返されたのは一度に4回切ったとも捉えられるほど

の連撃。腕、肩、腹、足が同時撃ち込まれた。あまりの衝撃で海堂の意識が飛んだ。

「アツ…」

「終わりだ」

そのまま蹴りを腹部に叩き込み海堂を吹き飛ばした。そのまま飛んでいくことはなく木々にぶつかってブレーキがかかる。そのまま地面に倒れ伏した。

「まあこんな所か。やっぱり素質はあるな。とりあえず寝とけな後で家に送っとくから」

イオの声を聞いて海堂は意識を失った。

第八話 ツケは必ず帰ってくる 前編

「アハハハハハ W W W!!」

海堂を指差しながら、橙は笑い転げる。褐色の肌は白い包帯で覆われており、目、口、鼻、耳以外の全ての部分に包帯が巻かれているため、海堂の姿はさながらミイラのようなだった。

あぐらをかいている海堂は目を細めてため息を吐く。

「笑わないでくれよお」

「というか、よく生きてたよね。あそこなんて言われてると思う?」

魔法の森の奥地。そこには怪物がおり、今までの地に向かって帰ってきた人間はいない。万屋の仕事の時に蕎麦屋の店長に聞いた話だ。

「さあ?奥地じゃないの?」

「食糧庫だよ。あそこに行けば、瀕死の人間がごろごろ転がっているの♪」

「…」

もしかしたら自分も食われていたのではないのか?そう考えると身震いが止まらなかった。橙は俯いている彼を見て後ろから抱きつく。

「うわあ!?!や、やめろ!藍さんにまた誤解される!」

突然の橙の行動に驚く海堂。橙は海堂の首筋に顔を近づけたと思えば、強く歯を立てた。巻かれている包帯の隙間を縫って歯を立てられた柔肌には傷が付いて、赤い血が流れる。橙は海堂の血液を少し吸って、味を確かめるように口内で舌を転がす。

「うーん?」

「急に本性出すのやめてくれ!怖い!」

急に噛みつかれて、海堂は顔を青ざめる。しばらくすると、橙は噛み付くのをやめると話を始めた。

「うん。不味くはないけど…妖怪はこの味嫌うから食われることはないよ」

「え?…そうなの?てか、さっきのアレってそういうことかよ」

「それでね」

その後も橙による食レポが続いた。普通の人間と違って海堂の血液には常に魔力が流れ込んでいるので、かなり癖が強いらしい。しかし、このクセがある味が八雲紫のような大妖怪には好まれる味らしい。

「そもそも、カイドーは人間じゃないからね。何か理由がない限り、妖怪には襲われないよ」

「こんなんでも一応人間だ。断言しないでくれ」

「…言わせてもらうけど、そういうの良くないよ？そろそろ割り切らないと」

橙の言っていることは正しい。海堂は元は人間だ。

しかし、元が人間であるだけであり、今はホムンクルスなのだから、人間ではないと言い切れてしまう。

その言葉を受けて海堂は黙り込んでしまう。

「そういえばルーミアの事。そろそろ答えを聞きたいな」

そして結論を後回しにしていた話を今ここで掘り返される。海堂には見えていないが、橙の今の顔は人間を誘惑できるような妖美な笑顔を浮かべていた。そして、その言葉には確かな重みがあった。

「なんで連れて帰ったの？そろそろ話してくれないと…」

そう言っただけで橙は再び海堂の首に噛み付いた。先ほどは甘噛みぐら이었다が、今は肌にしつかりと跡が付く力で噛み付いている。

どうやら、誤魔化せば殺すという警告をしているのだ。

橙は別に海堂を好きではないが、嫌っているわけではない。しかし、八雲の従者として、人間でも妖怪でもないどっちつかずな存在が気に食わないだけであった。

「お、俺は…」

今まで気づかなかった。いや違う、気づかないふり、見てみぬふりをしていただけだ。自身を人間と思っている自分。自身を妖怪と思っている自分。

自分自身に向き合う時がきた。

第九話 ツケは必ず帰って来る 中編

「…わからない」

「…本当に？」

海堂が紡いだ言葉はたったそれだけだった。橙はその言葉に不快感を覚えながらも、海堂に問いかける。

「キミは自分のことを人間だと信じてるんでしょ？ルーミアは妖怪。海堂が人間なら、やみくもに人間を襲う野良妖怪なんて見過ごさず、退治するでしょ？」

海堂が本当に人間なら、人を害する妖怪を人里に連れてくるマネなんてしない。人間なら妖怪を退治する。この時点で海堂は人間とは考え方が違うのだ。

「……」

海堂は口を閉ざしたまま、喋ろうとしない。それに嫌気が差した橙は再び首筋に噛みつき、そのまま肉を噛みちぎった。

「アツツ…ツ！ツ…ツ」

激痛が走り、海堂の首筋からは血が絶え間なく溢れ出す。しかし、出血はやがて止まり、傷が塞がっていく。

「…ねえ、わかったでしょ？もうこっち側なの。私としてはその方がいいな」

橙は海堂に噛み付くことで、彼の体が人間の体ではないことを改めて確認させたのだ。ホムンクルスの体は人間よりも頑丈で、治りも早い。事実、イオとの戦いでボコボコにされても、包帯ぐるぐる巻きだけで済んでいるのだ。

「自分の体が人間じゃないのはわかってますよ…」

「なんだ。だったらすぐに言ってよ」

「でも、妖怪でもないと思うんです」

「は？」

橙は海堂の言葉に一瞬思考が止まった。この女…いや、ホムンクルス何言ってるんだ。人間でもなく妖怪でもないのなら、橙の目の前にいる生物は一体何なのか？

「…どういうこと?」

「妖怪は人間を捕食するか、恐れさせなければ存在することができない。妖怪にとって恐れは栄養だ」

海堂は、妖怪という存在についての話を始めた。もちろん、橙は化け猫の妖怪なのでこの事は知っている。

「急にどうしたの? 妖怪の私にそんなこと教えるなんて」

「つまり、ルーミアが人間を捕食する行為は生きるために必要な行為…だよな?」

「そうだけど…まさか、そのために人間が犠牲になっても構わないとでも言う気?」

藍様から海堂は死にかけていた人間であり、その魂をホムンクルスに入れた存在であると聞いた。さつきは妖怪だと認めさせたが、その根幹は人間には違いはない。

「えっ? そうだけど?」

しかし、その考えは海堂の返答によって打ち壊された。しかも、顔色一つ変えずに言つてのけた。今まで会ってきた人間の中で、人間としての重要な物が欠けている。だが、今の橙では何が欠けているのかわからない。とんでもない異例人物を前に頭を抱えた。

その時、玄関から戸が開けられる音が鳴る。

「橙♪海堂はちゃんと働いて…」

藍はカゴを片手に万屋に室内に入る。藍が入るとそこでは、橙が海堂をアスナ口抱きをしており、海堂の首筋に歯を立てていた。その様子に藍は持っていたカゴを落として、絶句した。

「あつ、藍さん違うんです藍さん! これは…わ、訳があつて」

「藍様! 海堂は悪くないの! だから…」

海堂はアワアワと弁明をし、橙は必死に誤解を解こうとする。しかし、今の藍は冷静さを欠けようとしていた。

「おい、海堂。お前…私の橙に何をやらせた?」

まるで地震のような威圧。海堂は涙が溢れそうになるのを堪える。

「違うんです! 本当に違うんです!」

「…何が違うんだ?」

まさに修羅場。藍の氷のような真顔は見ただけでブチギレていることがわかる。

「藍様。誤解なの！海堂は悪くない！」

「……」

橙が海堂の弁護をする。流石に誤解されて色々拗れるのも橙としては良くない。藍は真顔のまま橙を見つめる。もし、嘘をついて誤魔化そうとしても橙は藍の式神なので、一瞬でバレる。しかし、今回は嘘も何もないので、橙の言っていることが正しいことがわかるのだ。

「…話を聞こうか」

藍はため息を吐き、そう言った。二人は安堵する。もし、このまま誤解されたままだったら、大変なことになっていただろう。

そうして、突如、発生した修羅場をぐり抜けて今までの話を藍に話すことになった。

第十話 ツケは必ず帰ってくる 後編

「……」

藍に先ほどまでの出来事を話した後に、海堂は気絶するように倒れて寝た。今ここにいるのは橙と藍の2人のみになっている。

「橙、お前が海堂に思う所はわかる…すまないが、もう少し慎重に彼を扱ってくれないか？」

「…藍様、私はカイドウは危険だと思う。人間でもなければ妖怪でもない存在だよ？今は従順だけど、その腹で何を企んでいるか…」

橙は自身の不安を語る。紫、藍、橙の三人の妖怪で今までやってきた。しかし、部外者が現れて橙としては納得がいくものではなかったのだ。

藍は倒れている海堂に目をやり、口を開く。

「コイツは…紫様でもわからない事が多い、いわゆる厄ネタと区別される人物だ」

「なら、なんで？」

「海堂の思考回路は両親を探すという目的だけで行動している節がある」

「両親？」

「そう、両親だ。ここに来る前の彼はその目的をずっと完遂するために、周囲にバレずに行動していた」

八雲家に運び込まれた時も、紫が海堂の全てを知っていると口に出した時に豹変したことを思い出した。あの状況で、「お前は誰だ？」とか「なぜ自分のことを？」の前に自分の両親について聞き出そうとしたぐらいの執着だ。

「じゃあカイドウの両親って生きてるの？」

「それはわからない。どのみち、見つかるまで彼は探し続けるだろう」

「カイドウが両親を見つけた時、その後はどうなるの？」

「…考えたくないな」

海堂は両親への執着で生きている。まるで、大事な人を殺された者の復讐のように。

ここからは藍の考えになる。

彼はここまでの人生を両親の捜索に捧げているのではないか？ 社会人としての枠組みを外れず、当てのなく探す。

自分の体が女性の物になっても、驚きはするが元の体に戻ろうとはしていないのが、彼の異質な思考を裏付けている。むしろ、寿命というタイムリミットがなくなったという利点がついてきた。

幻想郷に迷い込んだのは一種の運命。遠からず海堂は両親に出会うだろう。両親が生きていれば共に過ごすこともあり得るかもしれないが、20年も前に行方不明となっている。期待は薄い。

両親が死んでいた場合：彼の目的だった「両親の捜索」は無くなる。そして、海堂の生きる目的がなくなる。それだけなら別に構わないのだが、何をしでかすのかわからない。むしろ、両親の捜索に人生を丸ごと捧げた人間だ。論理や思考回路が人間とはズレている。

「…紫様はどう考えているのだろうか」

紫の式神として、ずっとそばに仕えていた藍でさえも八雲紫の考えを模索することはできない。

第十一話 茶屋的一幕

「どうしたもんかな…」

あれから数日が経った。海堂は万屋を再開させて、そこその依頼をこなして行つた。そして、仕事が終わり日も落ちてきたころ、海堂は人里にある団子屋でみたらし団子を啄みながら、うんうん唸つていた。持っている串には食べ残しすら残っておらず、何も付いてない串をくるくる回していた。それをみた茶屋のおばちゃん海堂に近づくと。

「あの…かれこれ1時間が経っているけど、注文をしてもらいたいのだが…」

「…ん？そんなに経っていたのか、じゃあ追加で緑茶とみたらしの追加をちょうだい」

「あつ、わかりました…」

おばちゃんは海堂からお金を渡されると、空いているお皿を回収しそそくさと店の中に戻っていく。そして、うんうん唸る海堂に近づいてくる者が2人現れた。

「…海堂？こんなところで何してるの？」

「…お？博麗さんに桜さんじゃないか」

「…こんばんは」

「ちよつと、そつちで呼ばないで、私は霊夢よ」

紅白と表せるような赤と白が特徴的でやけに開放的な巫女服を着て、暗茶の真つ直ぐな髪に茶色の眼。赤いリボンをつけた少女がそこにはいた。

彼女は博麗霊夢。幻想郷と外の世界の境にある博麗神社の巫女であり、主に妖怪退治と結界に携わっている。妖怪が跋扈する幻想郷で人里が存在し続けられる理由の一つであり、いわゆる妖怪への抑止力である。

ちなみに、身長は海堂よりも高い。

「俺はここで団子食つて色々考えてるんだ。そちらは？」

「買い出しよ。桜とは道すがら会つたの」

桜はコクコクと首を縦に振る。どうやら、海堂と会ったのも偶然のようだ。

「それで、何してるの？仕事は？」

「今日はもうないよ。考えごとがあるってさつき言ったじゃん」

「その考え事って？」

「…そんな性格だっけ？ちよつとイオのことだな…」

海堂がイオという名前を出すと、周囲がざわついた。霊夢は何も反応しなかったが、桜は体を強ばらせる。

「イオのことで何？」

「いや？ボコボコにされたからどうしたもんかと…おばちゃん？団子まだ？」

来るのがやけに遅いと思い、海堂は店に向かって呼びかける。すると、汗をダラダラと垂らしたおばちゃんが皿と湯呑みが乗っているお盆も持ってきた。

「へー、生きて帰れたんだ」

「まあ、包帯まみれになったけど。てか、なんでざわついてるの？」

イオという名前を出してから、ヒソヒソ声やザワザワが気になったので海堂は霊夢に聞いてみることにした。

「魔法の森奥地に赴いた人間があなたと1人を除いて帰ってきた人がいないから。帰ってきた人がイオという妖怪に襲われたと言っているからね」

「へー。それで桜から殺気を感じるんだけど…復讐相手とか？」

海堂と霊夢はイオのことを他人事と思っただけで話しているが、どうやら桜は違うみたいだ。右手を強く握って震えていた。

「すまない、無神経だった…」

海堂はそんな桜を見て、スゴスゴと引き下がった。こういうのはあまり首を突っ込むべきではない。鈴木 of 過去の話を聞こうとして、キレられそうになったことが生きた。

「あまり変なことには関わらない方がいいわよ？」

「気をつけとく…んじゃまたね」

海堂は団子とお茶を片して、おばあちゃんに皿を渡して団子屋を離

れた。桜のことは霊夢に任せることにした。

海堂は鈴奈庵すずなあんに来ていた。鈴奈庵は人里の貸本屋で本の貸し借りはもちろん売買もしており、印刷・製本も少数ながら行っている。

主に扱うのは外の世界から入ってきた本：外来の本だ。種類はかなり豊富で、推理小説やベルリンの壁崩壊について書かれた歴史本と言った物からアガサクリスQという人物が書いた『すべて妖怪の仕業なのか』、『Qの哲学』。ネクロノミコン写本と言った癖が強い本まで置いている。

「えーと、魔術：魔術はどこだ？」

「海堂さんいらつしやい。何を探してるの？」

「小鈴さん！今は魔道書グリモワールを探してるところだけど…」

海堂に話しかけたこの少女の名前は『本居小鈴』もとおりこすず。鈴菜庵の店番であり住民でもある。『あらゆる文字を読める程度の能力』を持っており、妖魔本という妖怪の書いた書物を集めている。本人曰く、幻想郷一の妖魔本コレクターらしい。

「うーん。海堂に貸した本ですべてなんだけど…」

「そうか…何かあるかなー」

海堂は魔道書探しを諦め、面白そうな本を探すことにした。海堂は妖魔本に手に取りめくる。しかし、文字が古すぎて何がなんだかわからない。

「だめだ。妖魔本は読めそうにないな…おつ、これなら読めそうだ」

海堂は先ほどの妖魔本を戻して、比較的綺麗な本を手取る。すると、小鈴が声をかける。

「あつ、その本…」

「ン？なんか曰く付き？」

「いや、その本は私でも読めないのよ」

「え？能力あるんじゃない？」

「文がバラバラなの。暗号みたいになっててね。妖気は感じないけど、何かあるかもしれないし」

「へー…！」

海堂はその本を開く。そこに書いている文字は理解できないが、不思議と書かれている内容が伝わってくる。

「…『人間の可能性』？」

「え!?!読めるの!?!」

海堂がタイトルの名前を読み上げると、小鈴が飛び込んでくる。彼女は生粋のコレクターであり、好奇心がやるなど言われてもやっつてしまうぐらいには高い人物だ。

「うーん。ちよつとだけなら…」

「読んでみてください!」

「あ、ああ。わかった」

テンションが上がっている小鈴にお願いされ、仕方なく海堂はその本を読むことにした。

TO BE CONTINUE…

第十二話 本の返却日

『人間の可能性』

〈序章〉

この本を手に取っていると言うことは、人間っぽい化け物か、識字能力をもつ怪物だろう。はたまた極東に存在するという妖怪か？しかし、そんなことはどうでもいい。この本の目的は怪物や化け物、上位存在に立ち向かう術を伝えることなのだ。

そもそも、人間という存在は他の存在に比べると非常に特異なる存在。体は獣よりも脆く、頭は神などの偉大なる存在に比べると劣っている。しかし、それでも人間が絶滅してないのはその性質にある。その性質とは……

「それで！続きは?!」

「うーん……これ以上は無理そうです」

「え!?!」

一番気になるところで読めなくなっていた。コレクターの小鈴からするとそれは生殺しも同然だ。ポカポカと海堂を叩く。

「い、痛い痛い！仕方ないじゃないですかこれ以上は読めないんですから」

「せっかく内容がわかると思ったのに……これじゃ、本の価値がわからないじゃないの……」

「んー……なんとというか。今だからわかるんですけど、決まったパターンがあるんです。英語みたいな」

「エイゴ?」

「ああ、英語は日本語と違って、主語の後に動詞が来るんです。ほら、こーこーこの部分が『人間』で、この後の単語が『劣る』なんですよ」

「へー」

海堂は持ち合わせの学校知識を参考に推測立てることにした。もしかしたら、この本についてもつと踏み込めるかもしれないからだ。

「小鈴さん。これって外から？妖魔本ですか？」

「うーん、外からだったと思うけど…」

小鈴は少し自信なさそうに答える。

「外の世界にもこんな感じの本があるよ根拠なしであーだこーだ書いてる書籍」

「へー。でも、この本は似非じゃなさそうでしょ」

「途中までしか読めてないし…この本借り…」

「だめー！」

小鈴の声が強くなる。妖魔本を借りようとした時と同じ反応だ。

「まだ私が読めてないのよ？もしかしたら外からきた妖魔本かもしれないし絶対に渡さないから！」

「そこをなんとか…」

「それにあなたが借り入れた魔道書まだ返してないわよね？」

「…あー、そうだったね。あつ、忘れてないよ？」

「へー…返却日が今日までなのも忘れてないわよね？」

「あつ、アハハハ！」

持っていた本を小鈴に渡し、鈴奈庵を飛び出した。このホムンクルス返却日を完全に忘れていた。全くもって間抜け、愉悦である。こうして本居小鈴は本を守ることができたのであった。

side change 海堂直也

今日は何かと騒ぎな1日だった。イオの話題をしたら桜から殺気が出たし、結局怪しい本は借りれず、返却日を忘れて家まで走って取りに行った。

さて、ホムンクルスになって大体六ヶ月ぐらい。今では里の人たちとも仲良くやってる。紫さんが里の人の印象の境界をいじってると思う。日本人の中に明らかに俺みたいなのが混じってるのに違和感を感じてる奴がないからだ。

魔法使いとしての修練も積んではいるのだが、最近は何かが悪い。空は飛べるようになったけどスクーターぐらいの速度で、橙に見えせたら笑われた解せぬ。

攻撃面もルーミアの時とあんま変わってない。桜との稽古で瞬発力と反応速度は上がった。

先月、妖怪の山というところに行ったみたのだが、山を警護している白狼天狗の『犬走いぬばしり権もみじ』に見つかった。勝手に入ったのがいけないらしい。それでも人間じゃないからさっさと元の場所に帰れと言われた。幻想郷縁起によると文明レベルが人里より高いらしいので、どうにかして行ってみたい。正面から決闘を挑みたいが、あの白狼天狗かなり強そうだった。しかも、白狼天狗は天狗の中でも下っ端らしい(?)。今の自分では彼女は持っている剣を振るい、袈裟懸けで肩から切られてそのまま……考えるのはやめよう。

しかし、実戦経験を積まなければ強くはなれない。そこで、霧の湖に行ってみようと思う。霧の湖では妖精の中でもかなり強いチルノという氷の妖精がいる。彼女か彼かはわからないが、決闘を挑んでみよう。今回は紫さんの指示はないから思う存分自分の力をためよう。そうと決まれば準備をしなければ…

第十三話 氷のアイツ

霧の湖。妖怪の山の麓に位置しており、近くには寂れた洋館がある。常に霧がかかっているため視界が悪くさらに妖怪や妖精が集まりやすい。特に夏場では水場を求めて多くの妖怪が訪れる。そのため人間はあまりこの湖に近寄ることはない。ちなみに霧は昼間によく出る習性がある。夜間は霧が抑えめだが、妖怪が活発になる時間帯なのでどちらにしても八方塞がりである。そんな場所に海堂はノコノコとやってきた。

「…本で存在は知ってたがここの湖でかいな。直径なんキロだ？」

海堂は顎に手を当てて首を傾げる。実は霧が原因で錯覚が起きており、見かけより大きくないのが真実なのだが今の海堂がそれ気づくことはないだろう。

「…ん？」

呑気に湖を見ていた海堂は遠くに何かがいることに気づく。

「なんだあれ？見にいこう」

気になったので見に行くことにしたようだ。湖の周りを走って行く。

「むむむむっ…！」

カエルを目の前にして少女はそれを睨みつける。少女の視線はカエルに向けられており、その眼光は思わず身震いをしてしまうほど鋭かった。

「……うりゃー！」

少女はカエルに向かって手を伸ばすと、『ピシツツ』という音を立つ。一瞬のことだった。目の前のカエルがたちまち凍っていく。そして、カエルの入った氷の塊が出来上がった。

「…よしー！」

少女は満足そうに腕を組み、鼻を鳴らす。

「あのー、何をしてるの？」

遠目から見ていた海堂はカエルを凍らせてニコニコ笑顔な少女に

話しかける。

「ん？あんた誰？」

「通りすがりの通行人…面白そうなこととしてそうだったから話しかけてみた感じだ」

「ふーん」

少女は氷の塊となったカエルを湖に浮かべて、海道と向き合うように立ち胸をはる。背は海堂よりも若干小さく、あおい服装、鮮やかな薄い水色の髪、海を思い浮かばせるような青い瞳、彼女をより彩っている青いリボン。何より、その背には氷のように透き通った羽。まさに『美少女』という言葉に相応しい容姿をしていた。

「…はあ」

少女は守備範囲俗に言うとロリータコンプレックス。通称ロリコン。性愛の対象として少女・幼女を求める心理のこと。〈出典 Wikipedia〉外な海堂も思わず、息を漏らす。ルーミアも大概だったが、あれは人喰い妖怪と認識していたためそのような感想は抱かなかつた。

「そうだ！あなた名前は？」

「か、海堂直也。君は？」

「アタイ？アタイはチルノ！この幻想郷最強の妖精なのよ！」

チルノは腕を組み、エヘン！と体をそらす。海堂はチルノを言葉を聞き、一歩後ずさった。

…博識な読者ならご存知だろうが、ここでの幻想郷最強とは『幻想郷で最強』の妖精であり、決して幻想郷で一番強いと言うわけではない。

「幻想郷最強？…確かに強そうではあるが…」

「何？もしかして、アタイの実力知らないの!？」

「知らない」

「し、知らないって…なら見てろ！アタイの能力を！」

チルノはポンポンと怒り、海堂に自分の实力を見せるようだ。海堂はもう一歩下がってチルノを見る。

「えつと…あつた！このカエルを…ホイツと!!」

チルノは近くのカエルに手を向ける。すると、カエルは凍りついていき、中にカエルの入った氷の塊が出来上がった。

「カエルに傷をつけずに凍らせたのか」

「それだけじゃないよ!」

チルノは氷の塊を水につけて氷を溶かす。すると、中のカエルは何事もなかったように湖を泳ぎ始めた。

「なるほど。幻想郷最強の妖精と言うだけのことあるな」

「すごいでしょ!」

海堂はチルノの能力を見てスゴイと感心した。しかし、幻想郷でも強い存在というにはパンチが足りない。藍さんの方がずっと強そうに感じてしまうのだ。だが、下手に言って機嫌を損ねたら何が起きるかわからない。そこで海堂は最強という肩書きを利用することにした。

「:そんな最強のチルノに頼みたいことがある」

「ツツ!...言ってみて!」

「:幻想郷最強の妖精に勝負を挑む!!」

海堂は指をビシツとチルノに指す。チルノは突然の大声に少し驚いたが組んでいる腕は解かなかった。

「アタイに勝負を挑むなんて中々に見どころあるけど、こういうの蛮勇だつて大ちゃんと言つてたのよ!」

「それでも受けて立つのが最強なんじゃないの?」

海堂はチルノのもっともな返しを最強という肩書きを利用して答えた。チルノはむむむと唸り、自分の頬を叩いた。

「いいわよ!アンタみたいな人間モドキなんて、氷漬けにしてあげる!」

「あつ、命までは取らないでね?勝負であつて死合わけじゃないからね?」

「よーし!行くわよ!」

チルノの殺る気を見て海堂は確実に煽りすぎたと確信した。この勝負:負けたら命が危うい!!

「つて!?人間モドキ!?聞き捨てならないぞこのヤロー!!」

第十四話 火の粉

海堂は舐めていた。チルノという妖精の恐ろしさを。幻想郷最強を自称するだけの力はないだろうと高を括っていた。それは大きな間違いだった。

「ちよこまかとー!!」

チルノは空気中の水分を凍らせクナイの様に鋭い氷弾を大量に生成し、それを海堂に目掛けて撃つ。ルーミアを遥かに上回る弾幕に海堂は既に慢心を捨て去り、自分の中のスイッチを起動させていた。自身の体を魔法で強化し、横飛びですつ飛べるように脚力を強化する。

「…ツツ!!」

迫り来る氷の弾丸を湖を回るように避ける。元いた場所には弾幕が突き刺さる。地面が抉れ、山ほどの弾痕が残されていた。

「……フウ」

「いいかげんにしろ〜! さつきから避けてばつかりじゃない!」

チルノは頬を膨らませて、癩癩を起こす。戦いが始まって5分になるが、いまだに海堂は攻撃をしていないのだ。海堂はチルノの怒りを聞いて、深く息を吐く。

「どうしたものか…」

そして、視線の中心を空を飛んでいるチルノに向ける。いつでも攻撃が避けられるように身構えた。

ここまでの流れで勘づいた者もいるだろう。海堂は攻撃をしてないのでなく。攻撃ができないという状況に陥っているのだ。

再びチルノが弾幕を放つ。その弾幕はルーミアよりも量が多く、スピードも速い。威力だつて一発一発は大したことないだろうが、一発でも喰らえば立て続けに被弾することになる。

海堂が警戒しているのは攻撃後の隙を狙われることだ。弾幕を掻き消しながら攻撃できる『レーザー』は撃った後少しだけ動けなくなる。ルーミアの時なら木々を遮蔽物に出来たが、今回は遮蔽物はないに等しい。少しでも隙が作ればもれなく穴ぼこまみれとなるだろう。半端な攻撃は相殺するか、能力で防がれてしまう可能性がある。

「……グッ!？」

弾幕を避ける中思考していたためチルノ弾幕が足を掠める。掠めた部分は切り傷となり、チリチリ痛む。チルノは海堂に攻撃が当たったことに気づいていないが、すぐにバレてもう攻撃を仕掛けてくるだろう。

ここで海堂は賭けをすることにした。次にチルノが攻撃してきた時にレーザーを撃ち込む。他に方法は無いしこれ以上避け続けるのは難しいと判断した。

「あ〜もう！これでもくらえ!!!」

避け続ける海堂に痺れを切らし、大量の水弾を感情に任せて撃ち出す。これまでの弾幕より量が多いがバラけており、今までの回避方法では避けられないだろう。

「…!!今だ!!!」

しかし、海堂は弾幕を避けようとせず手を突き出す。ルーミアと戦ったときよりも早く魔法陣が現れてレーザーが放たれた。これなら当たる!!海堂は確信していた。

「うわっとー!」

「…え?」

レーザーは氷の弾幕を蹴散らしながらチルノを貫こうとした。しかし、チルノはヒラリとそれを回避し、レーザーは空へと消えていった。

チルノは痺れを切らして雑に弾幕を放った。つまり、隙ができるはずなのだが彼女はさつきヒラリとレーザーを避けた。

「ちよ、ちよっと危なかった…まあ！アタイはまだ本気出してないし！今から本気だしちやうから!」

チルノは両腕を横に突き出す。すると、水弾が彼女の左右から打ち出す。それは海堂の周りをジリジリと囲むような弾道を辿る。横跳びで大きく回避ができなくなったのだ。

さらに、チルノは腕を海堂に向かって突き出し、黄色の5way弾を海堂のいる方向に打ち出す。

「や、ヤバ」

後に、氷符「アイシクルフォール」と名付けられる弾幕の嵐は無慈悲に襲い掛かった。海堂は避けようとするもののレーザーを撃つた反動で動きは鈍くなり、さらに自身を取り囲むように飛ぶ氷弾に動きは制限される。

「アッ…」

そして、黄色の弾幕が海堂の腹部を貫く。それを皮切りに次々と被弾していく。感じたことのない激痛が彼の精神を蝕んだ。そのうち彼の脳は痛覚の許容範囲を超える。足は動かず、腕はプラリプラリと千切れかけ、体には大きな風穴が空く。吐血する間も無く意識を手放し、コントローラーがいなくなった体は崩れ落ちるように倒れ伏した。

目の前でボロ雑巾となった敵を見て、チルノはフンと腕を組みどうだアタイの力は！と誇り高く胸をはる。彼女がやったことは立派な猟奇殺人だが、妖精は純粹で善悪のアレがあまりない種族なのでこれは仕方ない事である。

「あー。楽しかった！これでアタイの最強伝説原作ではこんなこと言ってる。言ってるよね…？が証明されてしまったな！大ちゃんに教えよー！」

チルノはその場を去ろうと血みどろの肉塊に背を向ける。
ゴオオ

その瞬間チルノの背後に熱風を受けた。氷妖精は熱に敏感なためすぐに後ろを振り向いた。

「…え？」

チルノは絶句する。さっき倒れていた死に体が大きく燃え上がりながら立ち上がっていたのだ。さっきまで生きていた海堂とは別の存在。チルノは恐れ、そして拒絶する。先ほどよりも強力な攻撃で今度こそ倒す。

チルノは能力を限界まで引き出し、氷弾をソレ目掛けて打ち出す。何発も何発も連射することにより相手を物量で制圧する弾幕。後に雪符「ダイアモンドブリザード」と名付けられる弾幕は火だるま人間

に猛然と襲い掛かった。

「……」

緊急起動。敵対存在確認、脅威度中相当攻撃判断。作戦変更、攻撃方針確定。「サラマンダー」限定解除、冷却システム起動。射出

炎に包まれた人物が腕を振るう。すると、ソレの背後から大きな炎が現れた。その強大な炎はチルノの弾幕を容易く燃やし尽くし、その命を焼き尽くそうとチルノに迫り来る。回避しようにも大きすぎるその炎を目の前に足がすくみ動けなくなっていた。チルノは思わず涙を流したが炎は止まることを知らず、氷の妖精を飲み込んだ。

「……あれ？」

チルノは目を覚ます。さつき自分は炎に包まれたはずなのに。自分の体を見回すと焦げた部分は見当たらず、湖周辺は何も変化がなかった。先ほどの炎はなんだったのだろうか。

「…夢か！夢でよかったー！」

どうやらチルノは夢での出来事と結論つけたようだ。チルノは改めて友達の元に向かうことにしたのであった。

海堂の死体が消えていたことは彼女には気づけなかったようだが。

第十五話 別のやり方 6月26日改訂

「まーけた。まーけた。覚えてないけどまーけた」
「……」

虚な目をして天井のシミを見つめている包帯ぐるぐる巻きの少女は自分で作った変な歌を歌いながら自分を責めていた。その様子に橙はもはや憐れみを感じている。

「ああああ…私って雑魚なんだね。妖精にもボロ負けするクソザコなめくじなんだね」

「……」

海堂の自己嫌悪によって生み出されたドヨドヨとした空気が万屋を襲う。このままでは海堂の自己嫌悪が移るので橙は行動に起こすことにした。

「あのさ、お金あげるから何か食べてきたら？茶屋とか行ってお茶飲んできなよ」

「……いいの？わーい」

海堂は橙に一円札を押し付けられ、自分の家から追い出される。ちなみにこの一円札は海堂の金庫から橙が取った物であるもちろん、海堂はそのことには気づいていません。

行くところもないのでとりあえずいつもの茶屋に行くことにした
街道であった。

「……」

海堂は黙々とみたらし団子だけを口に入れていく。団子には餡子を乗せたものや醤油を付けた団子醤油団子と言ったら海苔を巻くのが当たり前だが、幻想郷に海は無いので海苔はないのだ。ないよね？ちなみにみたらし団子は砂糖醤油を付けたものなので醤油団子とは違う。があるが、海堂はみたらしだけを好んでよく食べる。その証拠に皿に食べ終わった串が六本も置かれていた。

「……はあ」

しかし、海堂の気持ちは晴れない。紫さんに見捨てられたら両親の

行方がわからなくなってしまう。そうなれば、また一からやり直し：いや、もう二度と会えないかも知れない。

そのためにはまず自分が強くならなければいけない。なので、挫折る場合ではないのだが。すると、重苦しいオーラを放っている海堂の元に、誰かが向かってくる。その人物はそのまま海堂の隣に座った。

「なんか大変そうだね」

海堂が男の声がした方に顔を向ける。そこには、頭に紙袋を被って白衣を着こなした男が自分の隣に座っていた。

「……は？」

思わず、強い声が出てしまう。そして、不審者を目の前にして海堂は固まった。

「ああ容姿は気にしない方がいい。それで、何か困ってない？」

「…はあ」

有無を言わせない強制力を前に海堂は生返事しかできない。とりあえず、彼の話に乗っておくことにした。

「…強くなるにはどうすればいいのかなって」

「それってドンパチの方？ゲームの方？」

「ドンパチの方ですね。最近、チルノっていう妖精に負けちゃって」

「ふーん」

男は空を見上げる。そして、海堂の背中を叩いた。パァン!!という音が鳴って激痛が走る。

「あゝあゝあゝ!?!何!?!」

「…なるほどなるほど」

「え?なんで叩いたの?すごく痛いんだけど?」

「うんうん。それでさ」

突然の暴力に海堂は男を問い詰める。だが、男は何事もなかったかのように話を続ける。

「君はちゃんと強くなれるよ。天才って呼ばれる人間よりもはるかに伸び代ある。ただ、今のところやり方を間違えてるね」

「え、無視?」

「魔法の森に霧雨魔理沙という魔法使いがいる。彼女はまだまだ未熟だが、得られる物があるはずだ。もし、チャンスがあるならアリス・マーガトロイドという人形技師の魔法使いにも会えるかも知れない」

「…とりあえず、魔法の森に行った方がいいのか？」

「香霖堂にも訪れてみるといい。お金はしっかり持っていけ、掘り出し物を逃すぞ。それと、森の奥地にはまだ行くな。君に得られるものはまだない」

言いたいことを言い切ったのか、男は席を立ちその場を去ろうとする。

「待ってくれ！アンタ何者なんだ？」

「…柳田東。^{ヤナギダヒガン} 迷いの竹林に赴くことがあるならまた会えるさ」

気がつくのと東はいなくなっていた。

「あの…お客さん。さつきからボーとしてますけど、ご注文はありますかね？」

「え？…いや、お愛想お願い」

団子の代金を払って、海堂は自分の家に帰ることにした。男の正体はわからずじまいだったが、助言をもらい、心が少し軽くなった海堂であった。

「あ、おかえり…あれ？なんかあったの？」

「ちよつとね。それと、怪我が治ったら魔法の森行ってくるから」

「藍様が心配してたよ？怪我しすぎだって！」

「あー、次は戦わないと思うから。魔法使いに会いにくんだ」

「あまり、藍様を心配させないでね？今度ボロボロになってきたら……わかるよね？」

「き、気をつけます」

数日後、怪我があらかた治るが万屋は開業せず、魔法の森へと赴く準備をしていた。自分が幻想郷に迷い込んだ最初の場所。前はルミアを倒すだけだったが、今回は霧雨魔理沙という魔法使いに会いに行くのが目的。戦いは起きないと思うがしっかりと荷物を整理していく。もちろん財布の中身はしっかりと入れて大抵のものなら買えるようにした。

さあ、魔法の森へ行こう。

第16話 香霖堂 ↑最新投稿デス

魔法の入り口近くに一件の建物がある。その建物は瓦屋根で一見和風の家に見えるのだが入り口はドアと洋風なものも散見できる。その割には窓は障子だし近くに大きな桜が一本生えていたり洋風なのか和風なのかよくわからない。

その建物の名前は『香霖堂』。この幻想郷で唯一外の世界の物や妖怪の物など外からの物も中からの物もほとんど扱っている。そして、海道は紙袋の男の助言に従いこの建物にやってきたのだ。

「……やっぱり、人里にある家とは違うな。見た目というか文化というか」

海堂は人里の家と比べてその異質さを感じながら、建物に入っている。店の中は：普通の物から明らかに変だと言える物によってごった煮の状態になっていた。別にゴミ屋敷ということではないのだが商品と思われる物が所狭しと並んでいる。そして、薄暗くもありおまけに埃っぽくジメジメしてる。どうやら閉め切ってるようだ。

「…あのく、誰かいませんか?」

内装が思ってたよりごちゃごちゃとしていたため海堂は誰もいないと思ひ呼びかけをする。

「ああ、ここにいるよ。初めて見る顔だね」

奥の方から新聞を手に持った男がやって来た。白髪のショートボブにメガネをかけた青年は海堂の顔をジッと見つめる。

「…なんですか?そんなジロジロ見て」

「いや、うん。珍しいものが来たと思って」

「……」

また自分の体に興味を示す人が現れた。海堂は目を細めて青年を睨む。彼もその視線に気づいて咳を一つすると改めて自己紹介を始めた。

「僕は森近霖之助。もりちかりんのすけもしよければ君の名前を聞かせてもらえないだろうか?」

こいつ小鈴さんと同じタイプいわゆる好奇心が強い人間。この夕

イプは煙に巻いても意味がないことが多い。しかも、集めてる物によつては巻き込まれる事もあるので要注意。だけど、たいていこの夕イプの人間はめっちゃ面白い。だ…と思いつながら、海堂も霖之助に名乗り返す。

「海堂直也です。いちおう男ですハイ」

「男?…そうは見えないけど?」

「あの、カクカクシカジカ死にかけてある人にホムンクルスに魂を入れてもらった話をしました。ちゃんと紫の事とかはボカしてます。本文でやれ? テンポ悪くなっちゃうから仕方ないね。で」

「なるほど。だからホムンクルスなのにやたら喋りや動きが流暢なのか」

「そういうの詳しいの?」

「知り合いの魔道具とか博麗の巫女のお祓い棒を作ったりしたからね」

「どうやら霖之助は魔法について海堂よりも詳しいようだ。海堂は魔法繋がりで霧雨魔理沙について尋ねることにした。正直、このようなタイプは人付き合いがあまりない傾向にあるため期待は薄いのだが。」

「霖之助さん。霧雨魔理沙って魔法使いを知ってます?」

「…彼女に何か用があるのかい? 知り合いというわけではないようだが」

「魔法について尋ねたくて。一人で学ぶには限界が近いというか」

「彼女はタダでは受けないかもしれないが君の体見ればおそらく見てくれるだろう。魔法についてはまだ修行中だから」

「とりあえずはうまくいきそうだ。一通り話は聞いたのもうここには用はないのだがお金はしっかり持っていけ、掘り出し物を見逃すぞという言葉が引つかかる。何か取りこぼしでもあるのかと店内を見回す。」

「一見するとよくわからない物のごった煮の陳列。しかし、海堂の思わぬ物が目に映る。それは幻想郷に初めて迷い込んだ時にイオにもらったリボルバーであった。その銃を見た瞬間冷や汗をかく。」

「霖之助さんコレは？」

「ああ、それかい？それは弾丸と呼ばれる弾幕を高速で撃ち出せる外の世界の武器だ。特別な能力がない者でも弾幕を撃つことができるらしい」

「値段は…？」

「すまないが売り物じゃない。欲しいのかい？」

さてどうするべきか。おそらくこの銃はイオが持っていた物だ。そして、海堂が借りて無くしていた物でもある。怒られる。まさかここで『レイジングブル』正式名称はトールス・レイジングブル。ブラジルのトールス社が開発した大型リボルバー。威力も反動もデカい。454カスール弾を比較的低位反動で撃てる代物。1990年代終わりに製造されていた。実は現代編の1999年時点で最新の銃器である。ちなみに、454カスール弾はHELLSINGのアーカードが使用する『454カスールオートマチック』に使われる『13mm爆裂徹甲弾』はこの弾丸の改造弾である。パーフェクトだウォルター（このセリフはジャッカルに対してだが）と再会するとは思われないんだ。

「頼みます。なんでもするので……」

「いいよ別に。それが撃ち出せる弾丸もないし鈍器にもならないからね。見た目はカッコイイから取っておきたいが……」

「なんでもします。自分も好きにし……」

「やめなさい！君の体は女性の物なんだから！」

「誰が男だつてえ!!」

「そんなこと言つてないよ!？」

結論から言うと海堂は霖之助から失くした拳銃を取り戻すことができた。私から言うと海堂の自業自得のだが…運が向いたということだ。

幻想郷特別譚

幻想郷でのお正月①

「「あけましておめでとうございますー!」」

新年、それは新しき一年の始まり。2021年が終わり、2022年の始まりである。それは幻想いりした海堂も例外ではない。

「んー、俺はここに来ただけだから特別という感じでもないんだよな」

「我々は妖怪ゆえに何度も経験してるからな。お前もすぐに慣れるさ」

八雲家。幻想郷のどこかにあるという八雲紫の住居。海堂、八雲藍、橙の三人がコタツを囲んでいる。

「…ん?」

ここで、海堂が違和感に気づいた。この主人いなくね?

「紫様はこの時期は冬眠してるからな」

「そもそも、正月だからといってお祝いすることも少ないからね」

「ええ…まあ、俺も向こうにいた時は蕎麦食べて神社に行くくらいしかしてないな。子供の頃は結構仰々しくやってたけど」

「え?どんなの?」

「話すと長くなるけどな…」

海堂は橙に子供の頃の話をすることにした。

海堂は両親を亡くしてから、親戚に引き取られた。その親戚が結構でかい極道の組長だったので、そういう仕事や礼節を間近で見ることが多かったのだ。

特に伝統を重んじることが多々あり、年賀状やら、お参りやら、年越し蕎麦やら、おせちやら、豪勢にでた。お年玉も多かったような。

「こんな感じがなく独り立ちしてからはあんまできなくなったけど」

「なかなか濃い人生だねカイドウ…」

「やけに肝が据わってると思ったが…なるほど、納得する人生を歩んでいる」

「…普通だと思っけど」

「ここに迷い込んだ人間は6割が喰われ、3割がここに残って喰われ、残りが外の世界に帰る。だが、大妖怪と対等に契りを交わすのはお前が初めてだ」

「紫さんのお眼鏡にかなっただけですから。ルーミアと遭遇した時は生きた心地がしなかつた」

幻想郷に来てから数ヶ月ちょっと。今までの日常は崩れ去り、今ではここで魔法の勉強をしている。人生何があるかわからないものがある。

「人間かどうか怪しいけどね♪」

「橙さん。何度も言ってるけど、俺は人間だから！ねえ藍さん！」

「……」

海堂は藍に同意を求めろが、目を背けられる。きっとノーコメントという意味であろう。橙は海堂を小馬鹿にするように指を差して笑う。

「…ええい！こうなつたら将棋で勝負だ。将棋盤と駒をとつて来てくださいー！」

「カイドウが行きなさいよ！私は化け猫なんです！」

「え〜！いいじゃん別に！妖怪でしょ！」

「カイドウは人間なんでしょ？ほら、行ってこ〜い」

「……お前たち、少しは落ち着け」

こうして、幻想郷での新しい一年が始まっていった。

「あらく三人で暖かそうにして。私も混ぜなさいよ」

「あつ、紫さん」

「紫さま!?冬眠してたんじゃ…」

「賑やかそうな雰囲気出してたら起きたくもなるわよ。さて、正月を楽しもうじゃないの」

「紫さんって祝い事をする人なんだねえ」

「…おそらく、海堂という新しい従者が来たから張り切っているのだらう」

「俺としては嬉しいな。それ」

今度こそ幻想郷での新しい一年が始まっていった。

小話集①

〈海堂の味覚な舌〉

鈴木と海堂が牛丼屋に行った時のお話だ。鈴木は牛丼を美味そうに食っている海堂にこんな質問を投げかけてみた。

「海堂ちゃん、回らない寿司屋と回る寿司屋どっちに行く?」

「……」

海堂は箸の動きを止めて、鈴木を見ながら咀嚼する。そう、海堂は口の中に物を入れた状態では喋らない人間だったのだ。律儀にマナーを守るのはいいことなのだが、人の顔を見て、黙って咀嚼し続ける様は実にシニールだった。

「……どうした急に? 回る方だけど?」

「へ、貧乏性な海堂ちゃんも回らない寿司なの…え? 今なんて?」

海堂のその返しが、不意打ちすぎて鈴木は都合のよい方に誤変換された。驚きつつも再び聞く。

「回る寿司って回転寿司のことよ?」

「知ってる。なんだそんなに悪いか? 回転寿司行くことが」

ここで鈴木はある事が頭に浮かぶ。自分はどっちか一箇所行けるとしたらどちらを選ぶ? という質問のつもりだったが、海堂はお金の事情から回る方を選んだのだと。

「ごめん。聞き方間違えちゃったわ! 回らない方と回る方、奢りでどちらか一箇所连接到してもらえるならどっちがいい?」

「ん? ……決められんな」

「なんでよ?! 普通は回らない寿司屋に行くわよ?」

海堂は頭を掻きながら言う。

「だって、回らない寿司屋は好きな寿司頼めないじゃん。あと、単純にマグロとかウニとかイクラが嫌い」

「マ…マグロ…ウニ…イクラ?」

こうして鈴木は海堂に高級寿司を奢らない事を決心したのであった。

〈神社の帰り道〉

「そういや鈴木。風祝かぜはふりってなんだ？巫女と何が違うんだ？」

「何よ急に？風祝は風鎮めの神事を行う人のことよ」

「風鎮め？なんだそりゃ」

守矢神社でのお祓いの後、海堂は鈴木に早苗の役職について聞いていた。

「風鎮めはにひやくとおか二百十日…つまり、九月一日と二日頃ね。この時期は嵐がよく来て、風害をもたらすから、嵐を鎮めるためのお祭りをするの。それで、風の神を祭る神職が風祝なのよ」

「へ…じゃあ、東風谷さんは偉い人ってことかあ」

海堂がのほほんと返すと、鈴木の目つきが細くなる。

「海堂ちゃん…まさか、惚れたとかないわよね??」

「ん、確かにあの娘は可愛いけどな。他に似合う人がいるよ」

「ふーん。まっ、それならいいけど」

「でも、驚きだな。あの無垢なセイラーアールが立派な風祝になっているなんて思いもしなかった」

「断罪!!」

その瞬間、鈴木は海堂にチョップを食らわした。ゴツツ!!といい音がなる great なチョップだ。

「痛ツツた!!何すんだよ!!」

「自分の胸に聞きなさいこの破廉恥!!」

「????」

結局、海堂はなんのこともわからずに家に帰ることになった。

〈気が動転してる!!! party〉

幻想郷にきて、海堂は体が女の子そのものになったり、怪しい妖怪、八雲紫の従者になったりした。そして、これは八雲邸で雑務をこなしていたある日の出来事。

「藍さん、洗濯物どうしますか?」

「ああ、渡してくれ。畳むから」

藍は海堂が渡してきた洗濯物を受け取る。すると、前方から強い視

線を感じ取った。橙がまたこの時はまだ、橙は海堂を邪魔者兼弄れる後輩ではなく、純粹に紫様と藍様にくつついてきた邪魔者として悪意を向けていた。こちらを睨んできているのだろうと、視線が飛んでくる方に顔を向ける。

ジー…

「…おい、どこを見つめている」

そこには目を細めて、藍の胸部を見つめる海堂の姿があった。海堂は体こそ女の物だが、精神はちゃんとしたギリ成人男性である。藍は一回シバこうとして、洗濯物をおく。

「弁解があるなら、さつきに言っておくがいい」

「…胸と身長が大きくていいな、俺もそのくらいあつたらなって…」

「は？海堂、お前は男だろう？」

海堂は細めていた目を大きく開き、藍に詰め寄った。

「そりやないでしょ藍さん?!いくら細くて、チビで、胸がまな板だからって男と言われる筋合いはないよ!」

「待て!お前は男であろう?!体が変わっても早く慣れるようにと言ったが、誰が女になれと言った!」

「俺は女だ!!」

藍は確信した。海堂は元々男性であり、体も男として相応しい物があつた。しかし、現在は褐色でギザ歯でまな板な少女になっている。つまり、どういうことかというところ…

「俺は女だから!○○○もありませんどこぞのスペ感!!」

「ええ〜!」

暴走。その一言に限る。ちなみに、暴走状態の海堂は藍のビンタによって気絶させられ、元の精神状態に戻ったようだ。

なお、ビンタによるショック療法絶対に使い方を間違えている。本来は鬱病や統合失調症の患者に対して、ある種の衝撃、身体的ストレスを与えて、症状の緩解を図る方法。は一時的なもので、これからも発生する事を彼女はまだ知らない。